

R18  
ADULT ONLY

聖晶希石

# エスフェール

Holy Crystal  
Espère







夢を、見ていた気がする。

とても——とても、長い夢を。

どんな夢だっただろうか？

思い出そうと懸命に記憶に手を伸ばしても、それらはほんやりと薄れて消えていく。そうする間にも記憶は薄れて、ただ夢を見たという記憶だけが降り積もっていく。今日もまた、一日が始まる。

夕暮れ時のことを、いにしえの人々は逢魔が時と呼んだという。今この瞬間、そう言いだした人の気持ち、少女——新倉朝香<sup>ともか</sup>にはとてもよくわかった。

朝香は普通の女学生だった。この日もいつも通りに学校に行つて、いつも通りに授業を受けて、いつも通りに部活を終えて、いつも通りに家に帰る——そのはずだった。

朝香は走っていた。

さつきまで橙色の光に照らされていた世界は、いつの間にかどんよりとした黒紫の色に染まっていた。

走って、

走って、

走って、

正しい走り方を忘れた身体を、朝香は強引に前へと押し進める。焦りが焦りを呼び、体育で習ったはずの効率的な走り方<sup>フォーム</sup>どころか、普段通りの走りすらままならない。

太腿が痛い。息が苦しい。喉の奥から血の味がする。それでも、止まるわけにはいかない。

しかし、朝香は不意に足を止めた。止めざるを得ない理由があった。

目の前に、黒紫色のヴェールのような何かがあったからだ。それこそが、色セロファンのように世界を黒紫に染めるものの正体だった。

「なにっ、これっ！」

一瞬たじろきながらも一刻も早くこの場から逃れようと、朝香はヴェールに向けて体当たりをする。布のように柔らかく見えるそれはしかし、地面のようにびくともしない。

「ちよつと……嘘……やめてよっ……なんでっ……！」

十余年の人生の中で一度として経験したことのない異常な事態に、朝香は完全にパニックに陥っていた。

しかし、彼女をパニックに陥らせている最大の原因はその程度のことではなかった。朝香を追い立てる何かは、単なる不審者程度では済まない存在なのだから。

「ふふふ……そう釣れない反応しないでくださいよ……！」

見通しの良い袋小路に追い詰められた朝香に、粘ついた劣情を隠しもしない声呼びかける。

それはシルエットだけならば人間のものから大きく外れてはいなかった。しかし、それを人間のようと表現する者は少数派だろう。

赤とも黒ともつかない表皮は、タコやイソギンチャクといったあらゆる種の海洋生物のそれを想起させる。その印象を補強するのが、人間型のシルエットから蛇足のように伸びる、無数の触手の群れだった。太さも長さも多様なそれらの先端は、どことなく卑猥さを感じさせる。体表面は全身を蛞蝓<sup>ナメジ</sup>のそれにも似た粘液が覆い、陸上だというのに夕日を照り返してぬらぬらと有機的に輝いていた。

中途半端に人間のシルエットをしているからこそ、強引に人間のカタチに押し込めたような歪<sup>いびつ</sup>さを感じる姿は、多くの人間が生理的嫌悪感を覚える、文字通りの異形だった。

「逃げてでも無駄無駄。ここらには結界が貼ってあります。誰にも見えませんし、聞こえませんよ」

そしてその外見と同じかそれ以上に不気味だったのが、そのような異形が流暢に人間の言葉を操っているということ。九官鳥が人間の言葉を真似ているのとは訳が違う。会社員を思わせる一見丁寧な言葉の奥には異形自体の悪意を感じられた。

「何よ……何なのよ……！」

この街には、人を襲う怪物がいる。そんな噂が聞こえだしたのは、半年ほど前からだろうか。だがそれは、誰かが無責任に流布した、ただの都市伝説だと朝香は思っていた。しかし目の前の出来事は、それが紛れもない真実であったことをこの上ない実感と共に、否応なく伝えてくる。

「ぐひひイ……」

「ひっ！ こないで……こないでよお！」

恐怖に裏返った朝香の懇願にも、当然とばかりに異形は答えない。

「嫌っ！ 嫌あッ！ やめて……許して……お願いだからあ！」

ゆつくりと、朝香の恐怖心を煽るように触腕を近づけてくる異形の顔には、確かな喜びが浮かんでいた。それは獲物を追い詰める獣というよりも、狩りを愉しむ猟師のような嗜虐的な笑み。触腕が朝香の両脚の先端から膝下までに絡みつく。

「っ……！」

「いいねえ。その顔お……その恐怖に満ちた顔が快樂一色に染まっ  
ていくのを見るのが私の一番の愉しみなんだ……」

元々人通りの多くない場所だった。もし人が通ったとしても、あ

の不気味なヴェールを超えて入ってくることはできるのか。自分は世界の裏側にも迷い込んでしまったのではないか。よしんば幸運にも誰かが助けに来てくれたとして、野生動物とは異なる、明らかに悪意と害意をもって襲い来ている異形の怪物をどうにかできるとも思えない。それでも、

「嫌あ……誰か、助けて……神様あっ！」

藁にも縋る思いで、朝香はいつもならば信じてもない神へと祈りを捧げる。

(なに、この……甘い、匂い……頭が、くらくら、して……)

いつの間にか、周囲には甘い香りが漂っていた。心地良いというよりも、甘ったるいと表現する方が近いその芳香が鼻孔を抜けると、とくん、とくとんと鼓動が高まるのを感じる。青ざめていた頬にはいつしか朱色が差し、吐息には熱っぽさが混ざりはじめた。

「はあ……はあ……」

「これでも私はフェミニストでねえ」

言葉とは裏腹に、異形の相貌が下卑た笑みを浮かべながら触腕をもたげる。先端は教科書でしか見たことのない男性器に酷似している。気持ち悪いと思っっているのに、先端部から視線をはずすことができない。

「嫌がる牝メスに無理矢理触手チンポを突っ込むなんてことはしないとも。とはいえ……」

怪物のグロテスクな触腕が制服のスカートの下へと伸び、パステルイエローのショーツに触れようとする。

(嫌っ……怖い、気持ち悪い……なのに、どうして……)



た。

「ごくっ……」

溜まった涎を呑み下す。まるで、身体が朝香の意思を無視して、これから起こることを期待するかのよう。

「……て……か……」

「どうしたあ？ 聞こえないぞお？」

あと数秒で、自分が自分でなくなってしまうことを、朝香は理解していた。目の前のあまりに甘美な誘惑へとむしゃぶりついてしまっている自分の姿が幻視できた。だからこそ、今の自分の最後の感情を振り絞る。抗い続けたのだと世界に刻み込むように、

「助けて……誰かつ……！」

誰へともなく救いを求めた、その時――

――祈りは、届いた。

「やめなさいっ！」

鈴の鳴るような声が、不気味な緞帳の内側に響いた。

怪物の動きが止まる。たった五音の短い言葉の中にも、その声には確かな意志力と優しさを感じさせた。

鋭い言葉が、朝香の頭にかかった桃色の霧を払う。

「なんですかア？ 折角幻魔が優雅な夕食を楽しもうとしている時に水を差すとはア……」

食事の時間を邪魔された怪物は、不機嫌そうに眉をひくつかせ、声のした方を睨み付ける。

「え……？」

その先にいたのは、一人の少女だった。

真珠のようにまん丸で愛嬌のある大きな瞳、瑞々しく肉感的な唇、目にするだけでその弾力を容易く想像できる張りのある餅肌。鼻筋の通った顔立ちがそれぞれのパーツの魅力を引き立てていた。はにかむように弓なりの円弧を描く眉は、美人特有の近寄りたさを感ぜさせない。ヘアピンで留められた栗色のセミロングが風に吹かれて艶やかに揺れ、清楚な色気を誇ってみせる。

朝香も通う御珠学園高等部の制服は、一年間での成長を示すようにやや窮屈そうに内側から押し上げられ、女性的な魅力を曲線としてさらけ出している。それをさらに強調するのが引き締まったウエスト。膝小僧が隠れる長丈のスカートは詰められもせず校則通りで、生真面目な彼女の性格を表していた。時折、風に揺れて覗く太ももには、むっちりとした肉が乗り、隠れているからこそ異性の視線を引き寄せる魅力を備えていた。

「阿古屋、さん……？」

――阿古屋結乃。

嫉妬するのも馬鹿らしくなるような、嫌味なくらい嫌味のない美少女に、朝香は見覚えがあった。直接言葉を交わしたことはないものの、その顔立ちは見間違えるようなものではない。その美貌には、絶望的な非日常にあって、なるほどそうと納得できるような非現実感があつた。

「あなた……いったい……」

幼さすら残る顔立ちとは裏腹に、胸元の膨らみは服の上からでも

隠し切れなほほどにその存在を主張し、怪物の無遠慮な視線を集める。

「ははあん？」

怪物が、得心いったように声を漏らす。

「さてはあなた、以前他の幻魔に調教しこまされたことがありますねエ？」

下卑た欲望に満ち満ちた視線に更なる劣情を上乗せして、怪物は愉快気に笑う。

「くくく。どこの誰のお下がりだかはわかりませんが、いるんですよエ。幻魔に与えられた快感が忘れられず、人間では満足できなくなつて幻魔のチンポを求め彷徨う殊勝な女性メスがねエ……」

粘性の強い視線が、少女の小柄な体軀を舐め回すように視姦する。自分に向けられたものでないというにも関わらず、朝香の背筋に怖気が走る。

結乃は怪物の言葉を肯定もしなければ、否定もしない。ただまっすぐな瞳で幻魔を見据え、優しげな色を帯びた視線が朝香たちに向けられる。

「これは良い。顔も、身体つきも、実に私の好みですよオ……」

逃げてほしい。そんな感情より先行したのは、異形の欲望の矛先が自分以外へと向かったことへの安堵だった。そんな自分を情けなく思いながらも、朝香にはどうすることもできなかった。

「いいでしょう。そんなに欲しいのなら、今日の主メインディッシュ 菜はあなたにしてあげますよオ……」

下卑た眩きと共にゆっくりと迫る怪物の触腕を前にしても、結乃

の瞳に恐怖の色はなかった。かといって、怪物の言うように、自ら怪物のことを求めているようにも見えない。

朝香の疑問に答えるかのように、ただ強い意志の光を宿したまま結乃は右手の中指に嵌めた指輪——その中心に据えられた大粒の真珠を手のひらに包み、息を吸い込んだ。その様子はまるで、祈りを捧げる神の信徒のようだった。

「カッティングアップ・エスフェール！」

吸い込んだ空気を全て吐き出すような勢いで、少女は高々と告げる。

声量こそ大きいのが、叫びとは違う。宣誓のような、あるいは歌にも似たその言葉に続いたのは光。

そうとしか表現することができなかった。指輪の中心に据えられた大玉の真珠から、薄桃色の光が波濤の如く溢れ出し、少女の身体を一瞬にして包み込んでいく。

「な、なんだア？」

さしもの怪物も、それには驚きを隠せずにはいた。あとわずかで少女の胸元へと届きそうだった触腕を気圧されるように引き戻し、身構える。

そうする間にも少女を包み込む光は光量を増してゆく。それは目映まばゆくはあつても、決して攻撃的なものではない。

それはさながら光の繭、あるいは二枚貝のようだった。少女の身に纏う服が光に、その光が再び光へと置換され、桃色の光の内側で、それらに代わる衣コスチューム 装が形成されていく。

胸元に、両手の甲に、太腿に、足先に、そして髪に、指輪から溢

れ出した光が大粒の真珠をあしらう。

コンマ数秒の間を置いて、全身にあしらわれた真珠から光が溢れる。

胸元の真珠から溢れた光が淡い桃色のレオタードインナーを形作る。ビスチェにも似たアウターパーツが肉感的な肢体を引き締め、眩いほどに白い太腿を半ばまで露わにするフレアスカートが伸びた。華奢な指先から伸びた光は二の腕までをロンググローブを、太腿の半ばから足先までをニーハイブーツが、それぞれ形作り、覆い隠していく。

最後に髪を彩る光が髪飾りとなる。漏れ出した光に染まるように明るい茶の長髪が、まるで桜が花開くように薄桃色に色付いてゆき、純白のコスチュームにも同色の刺し色が入る。

「絶望祓う希望の輝石、聖晶希石エスフェール・ペルル、推参！」  
その外見に相応しい、通りの良い美声で少女——エスフェール・ペルルは名乗りを上げた。

聖晶希石エスフェール・ペルル。それが救い手の名前だった。  
浮き上がった両足が大地を踏み締め、高らかに名乗り上げるまで、ほんの数瞬の出来事。それはさながら幼虫が美しい蝶へと羽化するかのような、優美にして劇的な変化——否、変身だった。光の殻の内側から現れたその姿は、朝香にひとつの単語を思い出させた。

「エス、フェール……」

それは、街に巢食う怪物の噂と共に流れる、もうひとつの都市伝説。誰かが怪物に襲われたとき、どこからともなく現れて、助けてくれる正義のヒロイン。

——聖晶希石エスフェール。

「ホント、だったなんて……」

テレビ画面の中にしか存在しないはずの存在。強く、優しく、美しい。少女ならば誰もが幼心に憧れた正義のヒロインの姿が、そこにはあった。

清浄な光を身に纏うその姿が、非日常による恐怖を、非日常の希望で上書きしてゆく。

「もう、大丈夫」

結乃——否、エスフェール・ペルルは優しくも力強いその笑みを朝香に向ける。

エスフェールが朝香の手を優しく握ると、触れ合った手と手から、温かい何かの流れ込んでくる。ストーブに当たったときのような、くすぐったさにも似た温かさが朝香の身体を包む。朝香の腹の奥で燻り続けていた淫らな欲求が、融けるように治まった。直後、強烈な眠気に襲われて、朝香の意識は落ちていく。

その場に崩れそうになった身体を、エスフェールが支えて路面に横たわらせる。

「大丈夫」

エスフェールの浮かべた微笑みに安堵を覚え、朝香は微睡みに身を任せた。

\*

「……幻魔！」



幻魔。

彼らはこの世の条理を覆す力——魔法を、醜く歪んだ自らの欲望を満たすためにだけに用いる怪物たちだった。

「そうか……あなたが噂に聞くエスフェールというヤツですか。なるほど、これは人気が出るわけだ」

希望の輝石、希晶石に選ばれた戦姫。それこそが結乃——聖晶希石エスフェール・ペルルだった。

聖石の戦姫は目の前の異形を睨み付けながら戦いの構えを取る。その瞳に浮かんでいるのは義憤の炎。

「卑しい欲望にまみれ、人々を苦しめる幻魔……あなたたちを私は絶対許しません！ 覚悟しなさいっ！」

「覚悟……覚悟とはなにかな？ なるほど、確かに必要ですわねエ……私に負け、その男好きのする身体で奉仕する覚悟を、あなたが！」

エスフェールの真っ直ぐな眼差しを向けられながらも、幻魔はまるで怯んだ様子もない。それどころか、変身によっていっそう肉感を強調された肢体を、愉しむように下卑た視線を強める。

だがそれも当然のことだろう。幻魔は低級のものであっても、軍人や格闘技の選手でもないごく普通の人間が敵う相手ではない。まして非力な少女の細腕でどうにかできるはずもない。彼らにとって、少女はあくまで餌か、良いところが玩具。少し特別な力を持っているようと、獲物を恐れる捕食者などいないのだから。

「私の愉しみを邪魔したのです。その分は愉しませてもらいますよ！」

結乃の身体を捕えようと、幻魔の触腕が振り下ろされる。イソギンチャクのそれを何十倍にも巨大化させたようなそれを、しかしエスフェールはバックステップで躲してみせる。

「当たりませんっ！」

「ほう。今のを躲すとは、ちよつとは動けるみたいですね……」

結乃がエスフェールとなったのは、そう昔のことではない。

半年ほど前のこと、結乃は先程の朝香のように幻魔の結界に捕えられた。そのとき未知の異形に襲われて、逃げ惑うことしかできない結乃を、身を挺して庇ったのが一緒にいた幼馴染の播磨晶はりまあきらだった。

晶の危機を前にして、結乃は願った。ただ、目の前で苦しんでいる人を——大好きな男性おとこを救いたいと。そんな無垢なる想いに希晶石は応え、彼女をエスフェール・ペルルへと変身させた。

恐れはあった。不安もあった。しかし迷いはなかった。

それ以降、結乃はエスフェール・ペルルとして戦い、人々を守ってきたのだ。

希晶石は結乃に様々なものを与えてくれた。幻魔の存在、その目的といった知識、そして何より戦うための——否、人々を救うための力を。

「しかし、ウワサのエスフェールがこれほどまでに厭らしい肉付きの女性メスだとは……イラストそのままじゃありませんか……」

幻魔が人知れず人を襲うように、結乃もことさら自分が幻魔と戦っていることを主張するつもりはなかった。にもかかわらず結乃の存在が知られているのは、結乃が助けた少女が、記憶を頼りにS N

S上にイラストを描き、アップロードした。

当人は当初、白昼夢のようと思っていたようだが、同様に結乃が助けた人々が自分も見た、と言いつつ始め、いつしか雑誌で取り上げられたり、漫画化までされている。

エスフェールという名前自体、結乃が自ら名乗ったものではなく、そこではじめて生まれたものだ。それを結乃が名乗るようになったのは、幻魔という恐ろしい怪物に出会い、絶望の淵に立った人たちに、希望の象徴となるためだ。

今やエスフェールはキャラクターとしては御珠市内のほとんどの人々に周知されている。もちろん、実在を信じている者がどれだけいるかはわからない。ツチノコやネッシーのように、半信半疑である人の方が大多数だろうが。

「てっきり美化されただけで、実物はもっと硬くて不味そうなメスゴリラかと思ってましたよオ？」

「っ、人のことをエッチな視線でばかり見て……」

「ぐふふっ。ニンゲンだって、食事を見て美味しそうだと思うでしょう？ それと何も変わりませんよ。それに、そのような格好をしておいてそんな台詞を言ったところで、説得力がないとは思いませんか？」

「こっ、この晶衣はそんなものじゃっ！」

結乃がその身に纏う希晶衣は、元々のデザインに結乃の持つ潜在的イメージを元に構成されている。その証左に水泳部に所属する結乃の晶衣の意匠は、競泳用の水着のそれに似ている。デザインそれ自体は気に入っているものの、確かに露出度は高めで、相手

が幻魔とはいえ、いざ指摘されると恥ずかしくもなる。

「どうでしょうね？ 本当は、幻魔のチンポでメチャクチャにされたいのではないですかあ？」

強い想い——願いは、奇跡を起こす。

ただの蛋白質とその他の物質によって構成された化学物質に過ぎないはずのものに、生命というものを宿す奇跡を叶え続けるように。願いの力はそれのみならず、自らの意思で条理を覆す奇跡を起こす。それこそが——魔法。

「やっぱり、話すだけ無駄のようですね……」

微かに抱いた話し合いでの解決も、望むべくもなかった。

「リュミエール・エペ！」

覚悟を決めた結乃の言葉に応えるように、希晶石から魔力が溢れ、手のひらに集まってゆく。結乃の純粹な希望を、真珠の希晶石が増幅し、力へと変換しているのだ。

「うん？」

一秒と経たぬうちに、結乃の手の内には一振の刃が握られていた。薄桃色の光で形作られた刀身は、一メートルに満たない程度だろう。その無垢なる光は、見る者に心を洗われるかのような錯覚さえ与える。流麗なシルエットは、武器と呼ぶよりもむしろ芸術品と呼ぶ方が相応しい。

光の剣。飾ることない名によって、その在りようを定められた魔力が変成した無垢なる刃。

「おおお、これはまた随分と綺麗な玩具ですねえ。いかにも女の子が好きそうです。ですが……」

幻魔の不気味な相貌に、下品な笑みが浮かび、瞬間。

「すぐにそんな剣なんか捨てて私のチンポを悦んで扱くようにしてやあげますよ！」

無数の触手の群れが、銃弾のような猛烈な勢いで結乃へと襲いかかる。まるで豪雨のような奔流。結乃が普通の女の子であれば、恐怖に目を閉じてしまったことだろう。

しかし結乃は目を閉じない。希晶石の神秘の力で高められた結乃の動体視力は、常識の遙か埒外にある。凄まじい速さで殺到する触手の群れですら、スローモーションのように感じられる。

結乃には武道の心得どころか、喧嘩のひとつさえした経験もないのだ。

それを成立させるのが希晶石の加護。どうすればいいのかわかる。そして思った通りに身体が動く。希晶石が、それを手伝ってくれる。

「遅い、ですっ……！」

それでも、無数の触手が生み出す暴風はかいくぐるだけの隙間すらもエスフェールに与えない。不可避の触腕がエスフェールを捉えた。

——そう、幻魔が錯覚したのをペルルは見た。

だが違う。幻魔の触手がペルルに触れる寸前。まるで、見えない壁に拒絶されたかのように、その先端が弾かれた。

空間固定。

空間を歪め、操り、切って繋ぐ——空間制御。それこそが結乃<sup>ペルル</sup>の持つ条理の埒外の能力だった。

その能力が再び発揮される。空間が押し広げられ、一人がかいくぐるには狭すぎた隙間が、確かな道を作り出す。

「はあああああつ！」

触手の追撃が身体へと到達するよりも早く、結乃は光の剣を腰溜めに構え、腰を落とし、裂帛の気合と共に振り抜く。

それだけの行程を、結乃は刹那にも満たない間に完遂する。

静寂。

ずるり。

そんな擬音が一瞬の静寂を両断した。

右上と左下に分割された世界が、滑るように歪んでいく。

世界がズレるその様は、騙し<sup>トリックアート</sup>絵のような不可思議な光景だった。

景色と共に、怪物の巨体がズレる。光の軌跡からは青緑色の血液が噴き出し、苦鳴が漏れる。

「ぐ、があああああああああああつ！」

たったの一振りで、触手の半数以上を失った幻魔は、ようやく自分の身に起きたことを認識したように、痛みとも怒りともつかない絶叫を上げる。

人より遙かに強靱であろう肺腑から搾り出された悲鳴が、周囲の家の窓硝子を揺らす。境界内に地震計があれば、震度三、四の地震は計測できたかもしれない。

絶対の強者であるという確信が、現実<sup>リアリティ</sup>に裏切られていた。

異形の巨軀は光の刃によって切断されたわけではない。光の刃が描いた軌跡を目印に、空間そのものが断裂し、そこに存在していた者が空間と共に引き裂かれたのだ。

ぐぐぐ、と。見えない力に引っ張られ、巻き戻し再生でもするよう  
に空間が修復されていく。その修復に、怪物の異形は含まれては  
いなかった。

ようやく物理法則を思い出したかのように、異形の上半身が重力  
に引かれて下半身の傾斜を滑っていく。ほどり、という粘質の音を  
立ててアスファルトに落下。青緑の液体が溢れてこそいるものの、  
その断面は一切の光を反射しない無窮の闇だった。外側しか存在し  
ない、ハリボテの3DCGのようでもある。切り離された下半身は  
直立を保てずに倒れ、石炭にも似た黒い石塊となって崩れていく。

空間を切断する斬撃の前には、分厚い筋肉の鎧も何の意味も持た  
ない。文字通り必殺の一撃だった。

「こ、れは……」

自身の受けた欠損と、まるで最初からその先がなかったかと錯覚  
するほど鋭利な断面を見て、ようやく幻魔も結乃を脅威を認めたの  
か、その異形の顔つきが変わった。

黒目のない血走った双眸が絶望に見開かれる。自分が死ぬことに  
対してではなく、これ以上牝を犯すことができない、欲望を満たす  
ことができない、という事実への絶望が浮かんでいた。

「どうい……そんな……馬鹿なア……たかが小娘メスガキごときがあ、こ  
れ、ほどの……」

幻魔はその狡猾な知性を以って、自分と結乃の間にある、埋めが  
たい力の差を感じ取ったのだろう。太い腕と触手を使ってアスファ  
ルトに粘液質の軌跡を残しながら、じりじりと後ずさる。

決して、幻魔が脆弱なわけではない。相手が結乃ベルルで——エスフェ

ールでさえなければ、この欲望の化身は軍隊が相手でも一方的に蹂  
躪したことだろう。

「他者ひとを踏みにじり、身勝手な欲望を満たそうとする者——幻魔よ。  
希晶石の輝きが、その醜く膨らんだ欲望を浄化します！」  
告死の天使と化した結乃は、幻魔の頭部を指すように浄化の光刃  
を突きつける。

聖浄な輝きは致命の一撃を放ったときよりも遙かに強い。他者を  
傷つける力よりも、守り、癒やす力こそが彼女が真に求めたものだ  
った

「《イノサンス——》」

光の刃へと莫大な魔力が集束し、眩いほどの輝きが爆発的に増し  
てゆく。拡散された光が幻魔の身体に触れると、その赤黒い表皮か  
らじゅう、じゅうと焼け焦げるような音が零れ出す。

「ひいつ、やめッ！ やめてくれえ！」

結乃の無垢なる魔力が、幻魔の邪悪な魂を、その肉体を浄化して  
いるのだ。

振り上げられた刀身は、結乃の身の丈の数倍にまで伸長し、放出  
の瞬間を待つ。その刀身に触れれば、邪悪な存在は一瞬にして、存  
在した証すら残さずに消滅する、エスフェール・ペルルの必殺剣。

幻魔は地を這って逃げようとするものの、不可視の球体はその異  
形を包み込み、抵抗も敗走をも封じる。

「——レヨン——！」

光が、幻魔の身体を両断した。

海洋生物に似たその巨体が割れ爆ぜる。不気味な青緑色の体液を

散らせながら、怪物は蒸発していく。

「嫌だ。嫌だあ！ これは私の、私の力なんだあ。失いたくない。イヤ、イヤだアアア、ただの人間になんぞ、ぐお、ぐおおおおおおおおおおお！」

怨嗟の声を溢れさせながら、怪物の身体が消し飛ぶ。

その巨体が完全に消滅すると、後には奇妙な物体が残されていた。直線的な線と線によって構成される歪な多面体。大きさは野球ボール小、概形としては涙滴状で、表面は黒曜石にも似た硬質な光沢を持ちながらも、時折内側からの隆起によってドクンと脈打つ。下に向かつて伸びる髭とも、血管とも見える部分まで見れば、球根のように見えなくもない。

まるで重力を無視するように宙に浮かぶそれは、幻魔が放っていた禍々しい気配を、さらに煮詰めたような欲望の汚泥。幻魔の核——幻晶種げんしょうしゆだった。

「その邪悪な欲望、今ここで浄化します！」

光剣が球体の中心を貫く。

「——浄ビユリファイカシオン化！」

発声と同時に、光の剣から球体へと、薄桃色の光輝が注ぎ込まれる。エスフェールの力の根源である希望の光が、幻魔の力の根源たる欲望の闇光を中和し、浄化していく。

ピシッ、と。

球体の表面に亀裂が生じる。それを契機としたように、ピシピシ、ピキピキピキピキ。

連続する硬質な罅割音はまるで、幻魔の核コアが上げる悲鳴のようだ

った。みるみるうちに亀裂は広がっていき、光が漏れ出し——球体は内側から破裂した。

中から出てきたのは、くたびれたスーツを纏った中年の男性だった。意識はない様子で、路上にその身を預けているものの、胸元は規則的に上下している。

彼こそが、今しがた結乃が倒した幻魔の正体。正確には、幻魔の元となった欲望の持ち主だった。

幻魔は、幻晶種と呼ばれる異世界より去来した石とも球根とも言いがたいそれが、人間に寄生することで生まれる。幻晶種は宿主の心が持つ欲望を肥大化させ、その心が欲望に染まったとき、肉体までも怪物へと変質させる。

多くの場合、宿主として選ばれるのは元々強い我欲を持った者ばかりだ。エスフェールによって欲望を浄化された人間は、その欲望もなりを潜める。事実、臉を下ろしたその顔には、憑き物がとれたような、晴れやかな表情が浮かんでいた。

「……ふう」

戦いを終えて、ペルルは大きく息を吐き出した。

空間を覆っていた不気味な緞帳は消えてゆき、晶衣は光に還元されて、結乃が元々着ていた制服ブレザーを形作る。

「疲れた……」

実力的には終始幻魔を圧倒していたとはいえ、結乃はあくまで普通の女子高生でしかない。スポーツでもなく、明瞭な悪意を持つ他者と戦うという行為は彼女にとって決して無視することのできない精神的負担となっていた。

「でも、いいか……」

誰に向けるわけでもなく、結乃は小さく息を吐く。

その視線の先には、先ほど結乃が救った少女の姿があった。

\*

「あれ……?」

街路の中心。微睡みから覚めた朝香の頭の中には違和感があった。何かを忘れたような、そんな予感。

しかし、何を忘れたのかは思い出せない。後に残ったのは、悪い夢見から覚めたような、奇妙な違和感だけだった。

「私、何か大切なこと……なんだっけ……」

二度、三度と、後ろ髪を引かれるような思いに振り返ると、そこには同じ学年の少女の姿があった。魅力的なその笑みが記憶を刺激するものの、おぼろげな記憶は形を成すことはなかった。それどころか、思い出そうとすればするほどに記憶は薄れてゆく。後ろを振り返っても、あるのは何の変哲もない住宅街の風景だけだった。

後を引く微睡みが収まった頃には、何か起きたことさえも、朝香の記憶からはすっかり抜け落ちていた。

ただひとつ、記憶の奥底にあるのは——希望。絶望の底に差し込む光の温もりだった。

「まあいつか。今日の夕飯にかなあ?」

その温もりが何かを考えることもなく、朝香は他愛もない疑問を胸に還っていく。本来彼女のいるべき、日常の中へと。

\*

「よかった……」

首を傾げながらも、確かに自分の足で日常に戻っていく少女の姿を確認して、光の少女はほっと胸を撫で下ろす。

彼女のような人の日常を、幸福を、そして想いを守るため、結乃は聖晶希石エスフェールとして幻魔と戦い続ける。

「またか……」

繁華街の一角を歩きながら、男が誰に向けるでもなく忌々しげに  
眩く。

銀狼という言葉を連想する荒々しい銀髪。二十代のようにも見え  
れば、五十手前という印象も受ける。年頃の計りづらい顔には、明  
らかな苦味があった。

男の視線が、書店の店頭で平積みされた雑誌に向かう。

表紙には、ピンクと白のツートンの衣コスチューム装に身を包んだ美少女が  
アニメ調のイラストで描かれている。可愛らしいと表現するのが相  
応しいタッチではあるものの、片方でも頭ほどもある大ぶりの乳房  
はセックスアピールに溢れて、ぴたりとボディラインを露わにする  
コスチュームと合わせて、女児向けのアニメーションにはいささか  
不適當なデザインだった。すぐ下には《巻頭特集・聖晶希石エスフ  
エール》の文字がある。

「エスフェール……」

重ね重ね忌々しげに、男はその文字を口に出す。

聖晶希石エスフェール。

それが最近、巷で噂となつてゐる都市伝説であり、そこから派生  
したキャラクター作品の名前だった。

曰く、この街には化け物が現れる。

それは事実であり、男もそれを真実であると知っていた。何せ、

男こそがその、怪物を生み出している張本人なのだから。

幻魔ゲンマはかつて、人がこの国を立ち上げるよりも遙かに昔、この世  
界に飛来した存在だ。

その祖たる幻魔王は、仇敵との死闘の末、ほとんど自爆のような  
方法で封印されたが、仇敵の隙をついて、いくつかの種子をこの世  
界に落とした。自分の人格を分割・複製コピーした自分の手足。そのひと  
つが男——上位幻魔クオルツだった。

長い永い時を経てクオルツが覚醒し、活動を開始したのがひと月  
ほど前のこと。

自らの魔力によつて作り出した幻晶種を人間に植え付け、その欲  
望を養分に幻晶種を増殖させる。魔法技術を確立するどころか、  
創作物フィクションの産物と決めつけ、一切の抵抗力を持たないこの世界など、  
他の幻魔王の種子コピーが目覚める前にたやすく支配できる——はずだっ  
た。

その目算を狂わせたのが、まさしく雑誌で特集されている存在——  
エスフェールだった。

クオルツは奥歯を噛みしめながらも、ページを捲る。

化け物が現れる——その都市伝説には続きがある。

化け物が現れたとき、どこからともなく正義の救世主ヒーローがやってき  
て、助けてくれる、と。

最初はそれこそ単なる都市伝説として、誰も信じることはなかつ  
た。

それも致し方のないことだろう。目撃証言は複数あれど、誰一人  
として写真や動画といった記録媒体に証拠を残していなかったのだ  
から。

しかしある日、エスフェールに助けられたと名乗る少女が、記憶を頼りに描いたイラストをSNSにアップした。再現度の高かったそのイラストは、真実か否かの判断よりも、単純にキャラクターとしての魅力で拡散され、結果として実物と出会った目撃者の目にも留まるようになった。

かくして謎のヒロインは聖晶希石エスフェールという名を付けられ、人々の知るところとなった。そのムーブメントの大きさは凄まじく、登場から一ヶ月足らずで、雑誌で特集が組まれ表紙を独占し、コミカライズ漫画化まで始まっている。

キャラクターとしての人気などクォルツにとってはどうでも良いものの、エスフェールという存在が人々に希望を与えているという事実は、愉快なものではない。

エスフェールによって幻晶種の培養が滞っている現状、クォルツも無限に幻晶種を作り続けられるというわけではない。

「このまま雑魚を生み出したところで結果は変わるまい」

ならば、と、クォルツの口角が大きくつり上がる。

「アヴリル・アルマースの遺産は……オレが手に入れる」

獷猛な笑みを浮かべる男の影には、野獣にも似た異形の姿が蠢いていた。

雲ひとつない蒼穹。正午を過ぎて久しいはずなのに、堂々と鎮座する太陽は無慈悲な拷問吏のように御珠市を熱く照らし続けている。

下校時間を迎えた通学路は、帰路をゆく学生たちで溢れていた。

日暮れにはまだ猶予がある。ある者は猛暑に不満を漏らし、ある者はどこへ遊びに行くかと談笑しながら歩いていく——いつも通りの、平穏な景色。

「それにしても暑いな……もう夕方だつてのに、アスファルトで目玉焼きが焼けそうだ……」

下校する学生たちという分類カテゴリに一緒くたに含まれる少年——播磨はりま晶あきらは湯気にもなりそうな熱い吐息と共にぼやく。

猛暑への反抗とばかりに着崩された夏服は、一見すると不良を思わせるがそうではなく、もっと単純にだらしないだけ。顔立ちそのものはそれなりに整っているものの、暑さにだらけきったその表情は、二枚目よりも三枚目の方が相応しかった。

「もう、あつくんだったら……」

そんな晶を見て、隣を歩く少女が口先を尖らせる。

「いくらあつつかからってそんなだらしない格好……もうちょっとちゃんと……」

少女——阿古屋結乃あこやゆのは、どこか楽しそうに頬を綻ばせて小言をはじめめる。

真珠のようにまん丸で愛嬌のある大きな瞳、瑞々しく肉感的な唇、目にするだけでその弾力を容易く想像できる張りのある餅肌。鼻筋

の通った顔立ちがそれぞれのパーツの魅力を引き立てていた。はにかむように弓なりの円弧を描く眉は、美人特有の近寄りたさを感じさせない。ヘアピンで留められた栗色のセミロングが風に吹かれて艶やかに揺れ、清楚な色気を誇ってみせる。

去年から着続けている制服ブレザーは、一年間の成長を示すようにやや窮屈そうに内側から押し上げられ、女性的な魅力を曲線としてさらけ出している。それをさらに強調するのが引き締まったウエスト。膝小僧が隠れる長丈のスカートは詰められもせず校則通りで、生真面目な彼女の性格を表していた。時折、風に揺れて覗く太ももには、むっちりとした肉が乗り、隠れているからこそ男の視線を引き寄せ魅惑する。

思わず見惚れそうになるのを、晶は首を振って強引に中断する。

「だからあつくんは……」

「あー、結乃？ 前々から言ってるけど、さすがに高二にもなつてあつくんって呼ぶのはどうだろうか……」

「？」

何を言っているのかわからない、とばかりに結乃が小さく首をかしげる。頭の動きに追従して、栗色の長髪が揺れる。どことなく色っぽさを感じるその動作も、結乃は自覚がないのだろう。

基本的には成績も優秀で頭の良い奴なのだが、どこか天然で抜けているのだ。とりわけ、自分の女性的な魅力というものについてはまるで自覚がないからタチが悪い。

「あつくんはあつくんでしょ？ それでね……」

「はあ……」

気にせず言葉を続ける結乃に、晶は思わず大きな溜息を吐いた。昔から結乃はこうだった。いや、昔は良かったのだ。小さい頃なんてものは、男と女の違いも大したことはなくて、それを意識したことなどほとんどなかった。

それが自分の中で変わったきっかけを、晶ははっきりと覚えていてる。あれは小学四年の夏、その年のプール開きの日のこと。結乃の母に連れられて、三人で近所のプールに行ったときのことだった。

一年ぶりに見るようになった彼女の水着姿に、晶は息を呑んだ。

学校指定の水着越しに浮かんだ、自分のものとは明らかに違う曲線的なボディライン、まだ膨らみはじめだったとはいえ、確かに生まれはじめていた胸や臀部の丸みに、結乃が女の子なのだと、頭では知っていたものの、ようやく気付いたのだ。

今にすると、マセたスケベ小僧だったと自分でも思うが、それ以降、晶の中の結乃は、一緒に馬鹿のできる同性の親友のような存在から、可愛い女の子になってしまったわけだ。

それ以降、ただそうといった視点で見えるようになったから、というだけではなく、結乃の身体はみるみるうちに女性的な変化を遂げていった。胸も、尻も、もはやちよつとした膨らみ、とは言えないものになった。顔だって、テレビで見えるようなアイドルが霞んでしまうような、とびきりの美少女に成長した。

そうなってしまうと、もうダメだった。なにせ、結乃の身体ははつきりと女らしくなっているのに、距離感は幼稚園児のままなのだ。さすがに一緒に風呂に入ろうなどは言い出さなくなったものの、昼寝から起きると真横で猫のように丸くなって寝ていたり、晶の飲

みかけのジュースをそのまま飲んだり。正直、性を意識しはじめた思春期の男子にとってはたまったものではなかった。

周囲の男子たちから、女子とつるんでいることをからかわれるようになったことも手伝って、中学一年の春、変わらず接してきた結乃を、つい突き放してしまった。結乃はショックを受けたようでもあったが、クラスが別になったこともあってそれ以降、結乃も積極的に近付いてくることはなくなった。

それは晶にとってもショックな出来事だった。正直なところ、自惚れていたのだ。たとえ突き放すような態度をとっても、結乃は変わらない態度で接してくれるだろうと。

疎遠といえるほど距離をとったわけではない。普通の同級生というのは、あの程度の距離感なのだろう。だけど、自分からそうなるように仕向けておいて、想定外にその通りになってしまった、晶は相当に焦った。

結乃は誰に対しても分け隔てなく優しい。だからこそ、普通に接されるだけならば、結乃にはそのようなつもりはないのだろうが、その他大勢を相手にしているのと同じなのだ。

そうなってはじめて、自分がどれほど特別扱いをされていたのかに気付いて、それを自ら手放してしまったことに気付いた。

そんな微妙な距離感がもう一度代わったのは、高等部に上がった直後のことだった。三年ぶりに同じクラスになった結乃は、中等部の三年間が丸々なかったかのように、依然と変わらない距離感で接してくるようになったのだ。

それは間違いない嬉しかったものの、悩みの種でもあった。

もしかしたら嫌われてしまったのかもしれない。そんな三年越しの想いが杞憂だったとわかったのは、文句の付けようもなく嬉しいことだった。しかし高校生にもなって、勉強も運動もできて社交性もある器量よしの異性の幼馴染に、学校だろうと街中だろうとお構いなしに昔のままの呼び方で呼ばれる、というのはある種の拷問でもあった。男として喜ぶべきことであると同時に、学校獣の男子から殺意にも似た視線を向けられるのは、それなりに精神が参る。もちろん大部分は冗談めいたものだが、靴箱にカミソリ入りの手紙が入っていたこともあるので甘く見てはいられない。

もし仮に、恋人同士の関係になっていたのであれば、それも持たざる者のやっかみとして受け流せるのだが、単に結乃は昔と変わらないだけなのだから。

「……あつくん、聞いてる？」

気付くと、結乃の深い栗色の目が、半目になって晶を見つめていた。ここで嘘をついたところでロクなことにならないことは経験則で知っているし、ましてや結乃のことを考えていたんだ、などと正直に齒の浮くような台詞を吐けるほどの甲斐性は残念ながら晶にはなかった。だから、

「悪い、聞いてなかった」

「もう、あつくんだったら……どうせ女の子のことでも考えてたんでしょ」

呆れ混じりの視線が刺さる。

(確かに女のことを考えてたのは正解だけどお前だお前)

そう言いたくなって逆に半目で見つめ返すも、

(いかん、可愛いだけだ……)

不満げにむくれた結乃の顔は、やはり可愛らしくて、思わず目を逸らす。

「えっと……それで、なんの話だった？」

「だから……」

結乃が続けようとした言葉が途切れる。

「この、感じ……」

何かあったのだろうかと思わず振り向くと、整った顔立ちには切迫の色があった。

「おい、結乃……」

「あつくんごめん。用事思い出した！」

それだけを言い残して、結乃は駆け出した。

栗色の髪をたなびかせながら、人混みの隙間を掻い潜り、駆け抜けていく。

短距離走スプリントもかくやの勢いの疾走には追いつけそうにもない。

「どうしたんだ……結乃のやつ？」

答えを期待したわけでもない問いかけに、回答はもちろんなかった。

\*

幻魔だ、と結乃は直感する。

結乃の感知能力は、幻魔そのものではなく、幻魔が狩り、狩りのために結界を展開してはじめてその存在を感じ取る。それはすなわち、既

に狙いを付けられた被害者がいるということ——

「つ……」

急ぐには十分な理由だった。

ひとまわり大きな歩幅にもかかわらず、歩調を合わせる晶を見上げ、

「あつくんごめん、ちょっと急用を思い出した。先帰るね？」

言いながら、結乃は駆け出す。半歩前を歩く晶を追い抜き、置き去りにする。

「あっ、おい、結乃！」

戸惑う晶の声も、すぐに遠ざかる。

迷うことなく走ること数分で、結乃はそこに辿り着いた。

目の前には、黒紫色のヴェールがかかって、内側を外界から遮っている。

幻魔の狩場——結界だ。

幻魔の作り出す結界は一般人には認識できない上、侵入もできない。本来行こうとしていた道に結界があつた場合、当人の認識としては嫌な予感がするという漠然としたものや、通行止めが成されているよう錯覚する場合によって異なるものの、その場を通らないよう心理的な忌避を働かせる。

希晶石の加護を持つ結乃は、強い精神干渉耐性を持つ。人除けの結界など意味を成さない。全力と呼べる速度での疾走を緩めることなく、結乃は結界に踏み込む。

ぬるりとした、粘性の高いゼラチンのカーテンのような感触を越えて、結乃の身体が内側へと呑み込まれる。

結界とは元より、内と外との領域を区切るもの。その定義通りたった一步、踏み込んだだけで、世界はその様相を大きく変えた。

物質としての風景そのものは変わらない。黒紫のヴェールが掛かっていることで、薄暗く色調が落ちているものの、結乃にとってごく見慣れた町並みでしかない。

違うのは、空気。それも、五感で感じ取れる違いではない。

結界内には瘴気が満ちあふれていた。人の理性を融かし、欲望のままに暴れる獣へと変える魔性の毒素。それ自体は、幻魔の結界には当然とも言えるものだ。しかし、その濃度は希晶石の加護で瘴気に耐性を持つ結乃ですら、噎せ返るほどに濃い。

「この、瘴気……」

強い。

それも、桁外れに。

幻魔の姿も見えていないというのに、結界内に満ち満ちる瘴気が結界の主の力を能弁に語っていた。

だからといって、逃げるという選択肢は結乃にはない。

「私はエスフェール、みんなの最後の希望だもん……！」

人々から与えられた名前を、自分に言い聞かせるように呟くと、わずかな震えはどこか消えた。アスファルトを蹴る足に力が籠もる。更なる疾駆に身を乗せて、結乃は大きく息を吸う。肺の中に取り込んだ空気とともに、

「カッティングアップ・エスフェール！」

高らかに、宣誓するように、結乃は変身の起句を叫び上げた。

\*

結界の中心に辿り着いた結乃が見たのは、意外な光景だった。

幻魔は、人間にその核が寄生し、欲望を肥大化させることによって生まれる怪物だ。

その欲とは、性欲。

幻魔化したからといって、人間としての知性や会話能力を失うわけではない。むしろほとんどの幻魔は、普段は元の姿で人間社会に潜伏して獲物を見繕う。

しかし、幻魔が結界を張るのは獲物を定め、狩りを行うときだ。

暴れ、犯し、その心身を蕩けさせて、自身の欲を満たすとともに獲物に快樂欲求を植え付ける食事の場。

それゆえに幻魔の結界の中心では、凄惨な陵辱が行われている――はずだった。

もちろん結乃はそれを望んでいるわけではない。狙われた被害者を、悪辣な欲望の魔手が届く前に救えることもある。だが、それとも違う。

結界の中心にいたのは、獣のたてがみのように逆立った銀髪が特徴的な男だった。顔立ちだけを見れば青年だが、身に纏う雰囲気は二十代のようにも、五十代のようにも思える。

「はやく逃げてください。ここは危険です」

反射的にそう呼びかけてから、結乃は気付く。男から禍々しい気が放たれていることに。

瘴気だ。結界内を満たし、人の理性を融かし、狂わせる魔性の毒

気。そんなものを放つのが、ただの人間であるはずがない。

「来たか。思ったより早い到着で安心したよ」

涼しげな声だった。

これまで結乃が出会ってきたどの幻魔とも雰囲気違った。

「あなた、一体……」

「オレはクオルツ。偉大なる幻魔王より生まれ出でた欠片にして後継者よ」

「幻魔王……？」

「やはり、何も知らんようだな。お前がオレの所有物になるというなら、すべて教えてやるが」

「そんなもの、なるわけないでしょ」

「ひとつ、確認しておきたいんだけど」

「あなたは幻魔ということね？」

「ああ。そこの人間どもを素材に作った雑魚どもと一緒にしてもらっては困るがな」

「それを聞いて安心しました」

「何……？」

「それなら、遠慮しなくていいからっ！」

言うが早いか、結乃の手には光の刃。一息に踏み込んで、十メートル近くあったはずの彼我の距離が瞬く間もなく縮まる。

がいんっ、という鋭く硬質な音。結乃の振り下ろした刃はクオルツには届かない。アスファルトの路面から刹那の間に伸びた巨大な水晶柱が光の刃を留めていた。

「思いのほか、好戦的なのだな」

「人の心の幸せを壊すあなたたちを、私は……許さないっ！」

裂帛の気合が、力の均衡を破った。水晶柱が半ばより両断されて、結乃は光刃を振りぬく。その軌跡に自らが収まるより早く、クォルツは後ろに飛びのきそれを回避。

「許さない、か」

刹那の遅れで自身も両断されていたはずなのに、クォルツの餓狼の顔には驚きも焦りも一片として存在しなかった。

「それはこちらの台詞だ。数少ない資源リソースから生み出した幻晶種を毎度毎度破壊されて……腸あ煮えくり返ってんのはコツチなんだよ！」

餓狼の形声にも似た殺気に、結乃の身体が強張る。同時に、足元から波濤の如く水晶柱が噴出する。

美しくすらある透明で鋭利な石柱の群れがを、結乃は魔力を帯びた超反応で回避し、切り捨て、なんとか凌いでいく。

数秒と経たないうちに、通学路である路地は、まるで未踏の洞窟の内部のような、水晶柱に埋め尽くされた幻想的な光景へと姿を変えていた。

(この、幻魔……強い……)

身をひるがえして着地。内心の動揺を気取られないように、結乃は青年を睨み返す。

今まで戦ってきた幻魔とは、格が違う。

直撃こそ受けないまでも、鋭利な結晶が掠めた晶衣はところどころが裂け、うっすらと血が滲んでいた。刺すような痛みは、アドレナリンの分泌で幾分か抑えられている。掠めた程度で、戦闘に支

障をきたすような重傷はないが、これまでどんな幻魔との戦いでも傷つくことのなかった晶衣の防御力を、クォルツの晶柱はいともたやすく破ったことが結乃を驚かせる。

「だがまあ、良いだろう。アヴリル・アルマースの遺産が手に入ると思えばその程度安いものだ」

一瞬で激情を抑え、クォルツは冷めた口調で漏らす。それもまた今まで戦ってきた幻魔にはなかった冷静さだった。

幻魔は人の欲望が肥大化し、暴走した怪物だ。それゆえに、悪辣な思考を持って罫を仕掛けてくる幻魔こそいたものの、冷静さとは対極にあった。だからこそ、希晶石による助けがあったとはいえ、喧嘩のひとつもしたことのない結乃が今まで幻魔を倒すことができていた。

「アヴリル・アルマースの遺産……？ 希晶石のこと？」

「ふんっ」

結乃の問いかけに答えることなく、クォルツは餓狼の笑みを深める。

「それに、お前自身も実にそそる。幼さの残る顔立ちと裏腹メスの女らしい体型。特にその

チチだ。アンバランスで実にそそる……遺産のオマケにしては豪華すぎるくらいだ」

「っ……この、変態っ！」

「その反応……お前、未通しよじよだな？」

「そんなことっ……！」

「その身体でまだ未通とは、随分と勿体ないことだ。オレは未使用

でも使用済でも気にはしないが」

くくく、と下品な笑い声を零すと、クオルツは居住まいを直す。

「さて」

クオルツの身体を、影が飲み込んだ。立体感を失った影絵のような輪郭が、今度は瞬間的に膨れ上がる。大柄というわけでもなかったクオルツの肢体が、筋骨隆々の体軀へと変わる。頭部は鼻部が口元と共に大きく前方に張り出し、逆三角形に近いイヌ科の頭蓋を形作った。まるでだまし絵トリックアートのような光景だった。最後に影がその巨軀に染み込むようにして消えると、残るのは人の概形カクテを模した、人ならざる存在。

背丈は、猫背気味に大きく前傾しながらも二メートルをゆうに超えていた。長く伸びた顎の狭間には、鋭利な水晶の牙の群れ。全身を覆うのは、衣服ではなく毛。それも、石英の如く透き通った結晶質の獣毛だ。

美しい水晶の体毛を持った、二足歩行の狼。それがクオルツの本性だった。刃のような爪の伸びる五指を握り、クオルツは己を確かめる。握られた拳は力強い感触を返す。

狼の姿カクテを得た人、ではなく、人の概形カクテを不出来に真似た狼のような、歪な姿。

「くくく……」

眼光のみは人型であったときのまま、クオルツは餓狼の笑みを浮かべる。

本性を現し、完全戦闘態勢に入ったクオルツから、結界内部に充溢するそれよりも遙かに濃密な瘴気が溢れ出す。

(この幻魔……危険だ)

「なっ……」

初撃で決める。

相手の強大さを理解しているからこそ、結乃はそう決断する。

判断は一瞬。躊躇はない。

薬指にはめた希晶石が光を帯びて、腰溜めに構えた結乃の手に光の細剣レイビダが形作られる。

「セイクリッド……レヨン！」

様子見も手加減もない、全力の一撃を振りぬく。

光の軌跡が幻魔へと吸い込まれる。直前、

「流石はアヴリル・アルマースの遺産。素晴らしい力だ。だが――」

「その力も使いこなせなければ、意味はない」

「な……」

美しい半弧の軌跡を目印に、世界が真一文字に裂ける。

「この程度か」

溜息交じりにクオルツの爪が、光の刃を受け止めていた。

「……嘘っ……」

「今までお前の相手してきた雑魚どもと一緒にするな」

「っ……！」

クオルツが行った動作は単純だった、丸太のように太い腕を振るう。ただそれだけの行為で、生まれた結果は明快だった。

電車にはねられたような凄まじい衝撃が結乃を襲った。まるで、結乃の身体だけ重力のかかる向きが変わってしまったかのように、

結乃の身体が真後ろに落ちてゆく。

(え……?)

何が起きたのか、理解するよりも早く、二度目の衝撃が、今度は背中を襲った。

肺の中に溜まっていた空気が強引に押し出され、かはっ、という喘ぎとなって漏れる。

一瞬、視界がブラックアウトした。

断裂した意識が覚醒して、ようやく結乃は直前に自分に何が起きたのかを理解する。

必殺の一撃を回避されたこと、クオルツの一撃を受けたこと、背中からコンクリート塀にぶつかって、それすら貫通して住宅の壁にめり込んだこと。晶衣の防衛加護がなければ、全身がバラバラになっていてもおかしくない衝撃だった。

「呆気ないものだ。それが散々オレを邪魔してきたものか」

「んっ……く……」

のしかかる瓦礫を押しつけて、結乃は両手を開いては閉じる。

身体は動く。

魔力で自分の身体を走査する。

骨は折れていない。ところどころに内出血はあるものの、内臓の損傷はない。

——戦える。

痛みはある。これまでの人生で味わったことのない強烈な激痛が全身に走っている。それでも、戦わなければいけない。

「こんなことならば、もっと早くオレが相手をしておくべきだった

な。散々煮え湯を飲まされたのだ。まずはその肉体で楽しませてもらうとしようか」

クオルツの足元、薄暗い境界内には不自然なほど鮮明な影が、まるで水面であるかのように波打ったかと思うと、次の瞬間、影が上へと伸長する。そうして生まれた影の触手が、一本、また一本と伸びていき、結乃の四肢を絡めとる。蛸タコや蛞蝓ナメクジのような粘性の体液を纏った触手が晶衣の上を這いまわり、結乃を拘束していく。

「なっ……嫌っ……」

影の触手は見た目以上に強靱で、結乃が激痛を噛み殺して脱出を試みても、身じろぎひとつ叶わない。

豊満な起伏を帯びた胸元を、触手が明確な悪意をもって撫でてくる。全身に響く激痛と共に、強烈な嫌悪感に襲われる。

「嫌……嫌あつ！」

それは、結乃がはじめて上げた悲鳴だった。

希晶石に選ばれてから今まで、結乃はいつも、救う側の存在だった。

希晶石との親和性が高かったこともあり、幻魔に負けたことどころか、窮地らしい窮地に陥ったこともない。それゆえに、幻魔に襲われる立場となるのは、結乃にとってはじめての経験だった。

頭ではわかっていたつもりだった。

だが現実には、圧倒的な力に抑えつけられると、その恐ろしさは想像を遙かに超えていた。

痛みと恐怖と嫌悪感が背骨を這い上がる。

結乃が何も知らない被害者たちと違うのは、幻魔に犯された被害

者がどうなるのかを知っているということだった。

今まで結乃は、気付ける範囲で現れた幻魔を浄化してきた。

しかしその中には、結乃が間に合わなかった人もいる。

彼女たちはその誰もが、結乃に助けを求めなどはしなかった。幻魔が与えるおぞましくも甘美な快楽に、心の随まで蕩かされ、その虜にされてしまうのだ。

痛みは耐えられる。

その覚悟はある。だけど――

「ひっ……」

その先を想像した途端、気の抜けた、怯えの聲が結乃の喉を抜けた。揃いの良い歯と歯の噛み合いが合わずにガタガタと音を立てる。

ぞわり、と、胸の奥から怖気がこみ上げる。

「安心しろ。すぐにお前も虜になる。元より、オレたちはそのために存在するモノなのだから」

「そのために存在するモノ、ってどういう……」

結乃の浮かべた疑問符を無視して、人狼の影から触手が伸びる。

夜闇よりもなお深い欲望の黒が、結乃の豊満な肢体の上を這い、四肢に絡みつき、開いた唇を割って口内に押し入ってくる。

個体によって様々な形態をとる幻魔だが、本人の欲望が具象化した影から触手を伸ばすという点についてはほとんどの場合で共通している。

「いやっ……」

生理的な恐怖感に、結乃の口から悲鳴が漏れる。これまで命がけで幻魔と戦ってきた結乃が、エスフェールに変身して戦うようにな

ってはじめて上げた、か弱い悲鳴。

噛みついたところで、蝮の触腕のようにぬめりを帯びた表面には、文字通り歯が立たない。舌で押し出そうと試みても、ただただか舌の力と触手の力では比べものにもならず、ただ表面を舐め取るような動きになってしまふ。粘液が、舌中を覆う味蕾を刺激する。ちりちりと痺れるような苦味。料理酒として使うとき、一度だけ舐めたことのある焼酎の味にも似ていた。

「んっ……」

舌先の痺れが、舌の根を通じて脳髓へと駆け上がっていく。頭の方の方が痺れて、思考力が奪われる。頭の中にもやがかかったような、睡眠と覚醒の狭間に似た酩酊感。

幻魔たちが食事と呼ぶ行為に用いられる消化液であることはすぐにはわかった。

幻魔にとつての食事とは、言葉通りの意味ではない。

欲望の充足。幻魔は、素となった欲望を満たすことでその力を強める。それは金銭欲であったり、所有欲であったり、支配欲であったり、その中でも大半を占めるのが――性欲。

その充足のため獲物を、食しやすく蕩かせるための媚薬しょうかえき。どきんっ、と。

心臓の拍動が早まる。まるで恋愛ドラマのクライマックスを見ているときのような胸の高鳴り。気持ちの動きに依る反応ではない。媚薬によって結乃の肉体からだが急速に発情していた。血が巡り、活性化された代謝によって媚薬成分が循環する。純粋な化学物質であればありえない即効性の魔薬。

「はあ……ん……」

視界が揺らぐ。全身から力が抜けていく。下腹部に切なさがかみ上げて、晶<sup>コスチュム</sup>衣の内側で、乳首が硬くしこりを帯びているのがわかった。胸と股間が、衣擦れを起こすだけで、自慰のときにも似た、そしてそれより遥かに強い官能がこみ上げる。巡り巡る血流が、身体に酸素を要求し、結乃の息は熱く、荒くなっていく。身体が熱を持っていった。水晶の柱に映る自分自身の顔はすっかり紅潮し、今までに結乃が間に合わずに幻魔に食われた犠牲者たちと同じ表情を浮かべていた。

希晶石の加護は幻魔の欲望による侵食をある程度抑える。一般人が一瞬で気をやっってしまうような濃密な瘴気の中にあっても、結乃はしばらくの間、戦うこともできる。今まではそれで充分だった。しかし、あくまで抑えるだけで、完全に無効化できるわけではない。長時間瘴気に晒されれば侵蝕は避けられず、瘴気の塊ともいえる体液を経口摂取させられれば、その進行は加速する。

気を緩めれば、身を委ねてしまいたくなる快楽への誘惑を振り切って、結乃はクオルツを睨みつける。

「ほう……オレの体液を直に浴びてまだその目ができるとは。遺産の加護か、あるいはお前自身の意思の強さか？ どちらにせよ気に入った」

「やめ、てっ……」

拒絶の言葉を絞り出しただけで、喉を内側から愛撫されたような官能が抜けてゆく。

「まずはそのいやらしい乳から味わわせてもらおうとしようか」

クオルツが野獣の顔立ちに獣性の笑みを浮かべると、影から伸びた触手が、結乃の乳房へと伸びてくる。全身にまわった媚毒によって晶衣越しでもはつきりとわかるほど勃起した乳頭を目がけて、触手が襲いかかってくる。硬くなった先端に細い先端が器用に巻きつき、締めつける。

「ふあ、んああっ……♥」

喉奥から、自分のものとも思えない甘い声が漏れる。

あまりにも強烈なその感覚が、痛い、熱いのか、その他どんな感覚であるのか、結乃にはわからなかった。ただただ、途方もない快感が胸の内弾けた。

「いい声で啼くじゃないか。どれ、もっとよくしてやる」

乳首を責め立てているものよりもいくらか太い触手たちが、結乃の乳房そのものを締めつけてくる。

「ひう！ あっ、はあっ……」

晶衣に包まれた双丘が、触手の圧力を受けて淫猥に歪む。乳房に絡んだ触手の表面にはびっしりと繊毛が生えていて、それが晶衣越しに乳房を撫でるたび言いようのない感覚が背筋を走る。

「ふあっ、やあっ、あんっ、はあっ……」

晶衣の上からとはいえ、胸に触れられた経験などあるはずもなく、結乃は未知の刺激に翻弄されていた。

「そんなに気持ちが良いか？」

「そんなこと、なっ……いいっ！」

なんとか抵抗しようとするものの、四肢に絡んだ触手は結乃を離そうとはしない。そんな結乃の抵抗を嘲笑うかのよう、触手がさ

らに強く胸を圧迫してくる。

「あっ、んっ、だめっ、いやあっ、乳首、触ら、ないでえっ！」

「そうか。ならば存分に感じさせてやろう」

「やっ、いやっ、こんなっ、変なのっ、知りたくなっ、ひゃうんっ！」

胸を潰されるたびに、背骨が溶けるような快楽が走る。

「お前のスケベな乳はオレの好みだ。たっぷり可愛がってやる」

「ひっ……」

恐怖に顔を引きつらせるも、結乃にできることは何もない。触手は結乃の晶衣の胸元から入り込み、二つの膨らみの谷間を通って、下腹部へと降りていく。

「そこは、だめえっ……」

結乃の懇願を無視して、触手が臍の少し上あたりに辿り着く。

「ふあ、んっ……」

心の底まで蕩けてしまったわけではないのに、漏れる吐息ははつきりと艶を帯びてしまっていた。その事実が羞恥を煽り、身体の奥の深い部分に灯った火種に薪を加えてしまう。

触手の纏う粘液が晶衣に染みこみ、白い肌はみるみる赤みを帯びてゆく。

「随分と良い表情になってきたじゃないか」

邪悪な存在である幻魔に屈したくないという気持ちや、倒さねばならないという使命感が、もちろんなくなったわけではない。むしろそれらが心の大部分を占めてはいる。だが同時に、下腹の奥は熱を持って、それとは別の、期待の感情を宿していることを否定しき

ることはできなくなっていた。

すぐにでも目を背けたくなるようなグロテスクな肉槍から、目を逸らすことができない。唾液腺からは止め処なく唾液が分泌されて、口から溢れ出さないようにと嚙下をすると、まるで結乃が物欲しうにしているかのように喉が鳴る。粘り気の強い唾液が、食道を内側からコーティングしていく。

「待ちきれないのか？」

「誰が、そんなことっ……」

言葉とは裏腹に、結乃は無意識にクオルツの視線を追ってしまふ。視線の先、結乃の内側から染み出した透明な蜜が、クロツチに染み込んで、そのびたりと閉じた肉厚の二枚貝をくつきりと浮かび上がらせていた。

「十分に濡れているようだ。では、お前の純潔をいただくとしよう」

やや細い触手が、競泳水着じみた晶衣のクロツチ部分を器用にズラすと、結乃の割れ目が露わになる。

うっすらと桃色がかった秘裂はびたりと閉じて、多くの言葉を要さずとも、誰にも穢されていない聖域なのが明らかだった。しかしクオルツの媚薬液体に侵された身体は、結乃の意思に反して熱を帯び、じつとりとした蜜が内側から滲み出していた。

「いや……やめ、て……っ……！」

全力を込めてなんとか逃れようとするものの、生まれた動きは脱出にはまるで足らない。それどころか、期待に身悶え腰を揺らしているような扇情的な動きになってしまう。



触手ペニスが割れ目の寸前にまで移動する。毒蛇の頭のような先端から我慢汁が溢れだし、つう、と銀色の糸を引いて、結乃の割れ目へと落ちた。

「んあつ、ああつ……」

雫ですらないゆっくりとした粘糸の先が触れただけ。刺激としてはごく微弱なものはずなのに、結乃の口からはまるで媚びるような甘い声が漏れ出てしまう。

「すぐにお前の方からオレを求めようになる」

腹の奥で燃え上がる劣情が、その言葉が単なる誇張ではないことを物語る。

結乃の反応を愉しむように、肉槍はゆっくりとした動きで結乃の入口に近づいてくる。媚毒の影響なのか、露わにされた秘裂はまだ触れられてもいないのに敏感で、近づいてくる肉槍が帯びた熱を受けて蕩けていくような錯覚すらあった。ドクン、ドクンと、触手の表面に浮かんだ蚯蚓のような血管が脈を打つのに、結乃の心拍が同調しているかのようだった。

「いやっ……やめてっ……!」

幾度となく連呼した拒絶の言葉も虚しく、触手が結乃を貫こうとその先端を割れ目に触れさせる。空気越しに伝わっていた熱感とは比べものにならない、焼き鑊を押し当てられたような熱と快感に、目の前の景色が歪んで、頭の中身が蕩けてしまいそうだった。

結乃もエスフェールである以前に、一人の恋する乙女であることには変わらない。処女喪失はいつか、愛する男性と、ロマンチックなシチュエーションで結ばれるものと夢想していた。初めて自分の

恋心を自覚してから、ただの一度として、結乃が思い描く相手が変わったことはない。

下手に暴れてそれを迎え入れてしまう動きになるのが怖くて、結乃は必死に希う。

——誰か、助けて。

いつも自分が向けられていたその言葉を、結乃は心の底から叫んだ。

本当はわかっている。幻魔と戦うことができるのは、希晶石に選ばれたエスフェール——自分以外にいないのだと。そんな自分を救える者など、どこにもいないのだと。

それでも、願わずにはいられなかった。

奇跡が起こることを。

「くく。誰も助けになど来るはずがない。安心して快楽に溺れるが良い」

触手が結乃を貫く、その直前——

「やめろっ!」

強い意思を帯びた怒声が、触手の動きを遮った。

それは、結乃にとって聞き慣れた声だった。

何度も、何度も、毎日のように頭の中で反芻した声だった。

「なに……?」

突然の闖入者に、クォルツが不快げに眉根を寄せる。

思わず向けた視線の先、結乃が想像したとおりの人物が、播磨晶がそこにいた。

「やめろって言ったんだ。聞こえなかったのか?」

「面白い人間だ。だがどうやって結界に入ってきた？」

クオルツの放った問いかけは、結乃も抱いているものだった。

(なんで……あつくんがここに……)

幻魔の結界は狩りの場。閉じ込めた獲物を逃がさないための檻でもあるが、それだけではない。希晶石の加護により、魔力への抵抗力がある結乃のような例外を除き、幻魔の結界は侵入者を拒絶する。結界のある場所に行きたくない、あるいは寄りつくことができないという暗示を与えることで、外部から結界内への侵入者を防ぐ。

本来ならば晶が入ってこられるはずがない、のだが。

「結界？ あのピリツとしたやつか」

昔、結乃は晶から聞いたことがあった。

播磨家は御珠市最大の神社である玻璃磨神社の神主の家系であり、播磨という姓も元々は玻璃磨と書いたのだという。晶はその中でも分家の出ではあるものの、強い霊的感受性を持っているのだ。当時は結乃を脅かすための冗談かと思っていたが、幻魔という異界の怪物の存在を知った今、そういったものを感じていたとしても不思議ではない。

「そんなことより、早くその子を離せよ化け物。その子、嫌がってるだろ」

クオルツの異形が見えていないわけではないだろう。

水晶の人狼に立ち向かう晶の手は震えていた。その震えを隠そうと、両の拳を握り締め、手のひらには爪が食い込んでいく。両脚も震えていた。膝をまっすぐ伸ばし、恐怖に竦みそうになる脚をピンと張っていた。

怖くないはずがない。

結界内に入れたからと言って、見て見ぬ振りも出来たはずだった。結乃に夢中になっていたクオルツは、わざわざ晶をどうこうすることもなかっただろう。

それでも晶は、結乃を助けるために声を上げた。全身が本能的な恐怖に怯えながらも、その視線はまっすぐに水晶の人狼を見据えている。

「駄目ッ！ 逃げて！」

瘴気によって火照らされたせいも、喉を抜ける息が熱い。四肢に絡んだ影の触手が肌に食い込むだけで、下腹の奥へと痺れるような甘い官能が流れ、力が入らない。

それでも、たとえこの場でクオルツを野放しにすることになろうとも、晶だけは逃がさなければいけない。

「んなことできるわけないだろ！ 俺が引きつけるから、その間に君は逃げる！」

言葉の直後、それまで以上に強く拳を握り、晶が駆け出した。

短距離走者も見習うべき瞬発力。

だけど、ダメだ。

晶の動きは見事だが、あくまで一般人としては、という前提ありきの話だ。希晶石の加護を得た先程までの結乃と比べても、ずっと遅い。

結乃にはわかる。そんなものが、クオルツに通用するはずがない。晶は一気に十メートル以上の距離を駆け抜け、クオルツに殴りかかる。意識が結乃から晶に向いたのか、触手の拘束が弱まった。

しかし、緩んだ拘束から結乃が抜け出すよりも早く、

「フン……」

クオルツが、面倒そうに腕を振る。

そして、当然のことが起きた。

結乃に対する攻撃と比べれば、その勢いは遥かに弱いのだろう。

目の前の邪魔者を振り払うだけの動作。しかし、ただの人間に過ぎない晶にはそれを避けることもできず、跳ね飛ばされる。

「あがつ！」

苦悶の声。乾竹をへし折るような耳障りな音と共に、晶の身体がコンクリート塀に叩き付けられた。衝撃で塀はへこみ、ヒビが入る。晶は立っていることもできずに、その場にずりりと尻餅をつく。

「あ……」

一瞬の出来事に、結乃は動くことも出来なかった。

「げ………や………く……」

晶が、結乃に手を伸ばす。

その瞳は虚ろで、像を結んでいるようには見えなかった。

何を言っているのだろう、と耳を澄ませてみれば、

「逃げ、ろ……はやく……いま、の……うち、に……」

途切れ途切れに晶が口にしたのは、信じられない言葉だった。

これまで結乃が、幾度となく向けられて、答えてきた救いを求める言葉ではない。

逃げる、と晶は言った。

自分の命こそが危ういというのに、そんな状況でなお、晶は他者を救おうとした。

「ああ……」

そうだ、と結乃は昔のことを思い出した。

結乃が晶に出会ったのは、幼稚園に入るより少し前。

ひと目見た瞬間、恋に落ちた——なんて、ロマンチックな出会いではなかった。

県外から今の家に引っ越してきたとき、隣に住んでいたのが播磨家だった。

仲良くしなさいね、という母の言葉を不思議とよく覚えている。

しかし、そううまくはいかなかった。

たくさんの友達を引き連れていた晶は、ことあるごとに結乃にちよっかいをかけてきた。

公園の砂場で一人、砂の城を作っていたら晶に壊された。クレヨンで絵を描いていれば、晶はセットからクレヨンを引たくって、絵を滅茶苦茶にした。捕まえたカブトムシをバッグの中に入れられたこともあった。

晶のグループにいた子供たちとは仲良くなっていったものの、ことあるごとに嫌がらせをしてくる晶本人とは、どうしても仲良くならなかった。

——大嫌いだった。

顔も見たくない。そう母に訴えても、母はおかしそうに笑うだけで、ちっとも助けてくれなかった。

結乃と晶の関係が変わったのは、それから半年くらいした後。近所の子供会で湖の近くにバーベキューに行ったときのことだ。

仲の良くなった友達に皆、晶と一緒に遊んでいて、結乃は彼らの

輪から外れて、湖畔の棧橋に一人でいた。つい数日前、スーパーのお菓子売り場で母にねだって買ってもらったばかりの真珠の指輪を眺めていた。いくらか大きかった指輪は、結乃の指から抜けて宙を舞った。焦った結乃は思わず掴もうとして、湖に落ちた。

棧橋の高さ自体は大したものではなかったものの、当時の結乃は泳げなかった。まして、着衣泳などできるはずもなく、結乃はパニックになった。

その時だった。

自分が落ちたときと同じか、それ以上の水しぶきが上がった。

パニックに陥っていた割に、その時のことは今でも鮮明に覚えている。

驚いて結乃がそちらを見ると、そこにいたのは晶だった。

晶はそれまで見たことがないような必死な表情で結乃の元に泳ぎ着くと、結乃を支えようとした。

泳げない結乃と違って、晶はまだ泳ぎが達者だった——とはいえ、まだ小さな子供が、服を着たまま、パニック状態でもがき暴れる同じ歳の子供を引き上げるなどということができるはずもなかった。

結局、二人してバシャバシャと濡れかけていたところを、近くで釣りをしていた男性に助けてもらおうハメになった。

そして結乃は、ようやく気付いた。晶は結乃を嫌っていたわけではないのだと。

ちょっとかいをかけていたのも、悪意があつてのことではない。

引越してきて、周囲に溶け込めずにいる自分を輪の中に入れるため、積極的に構おうとしてくれていただけだった。

砂の城を壊されたと思ったのは、一緒に作ろうとして崩してしまっただけだった。

絵を滅茶苦茶にされたと思ったのは、一緒にお絵かきをしようとしていただけだった。

バッグに入れられたカブトムシはとびきりの大物で、晶にとつての宝物だった。

不器用だった。言葉足らずで、素直じゃなくて、意地っ張りだけで——優しくして。

その日だって、輪から外れて一人でいる結乃を探しにきていたのだ。

そんな晶を誤解し続けていたことを、結乃は後悔した。嫌いという感情はその気付きで真逆の感情に変わった。

そのときのことを話すと、晶は恥ずかしがって嫌がるものの、結乃にとつては大切な思い出だ。

その頃の記憶は、もうおぼろげにしか残っていないけれど、あの時のことだけは、今もはっきりと覚えている。そして、その時に胸に抱いた想いも。

「あつくんの、ばか……」

きつと——いや、まず間違いなく、晶は結乃を結乃として認識していたわけではない。

「思わず、助けちゃったんだよね……」

自分だとわかっていて命を懸けてくれたのではないことが、少しだけ悔しくて、それ以上に誇らしかった。

「でも、わかるよ。だって私は——」

思い出す。

自分が、どうなりたかったのか。

(そうだ……私は……)

勝てるとか、勝てないとか、そんなことは関係ない。

相手が誰かも関係なく、困っている人に、躊躇なく手を伸ばせる。損得どころか、できるかどうかも考えず——いや、頭で考えるよりも早く、身体が動く。

あの日からずっと。そう——ずっと、ずっと。

阿古屋結乃は、そんな晶に、恋し続けている。

晶の横に立つために、

胸を張って一緒にいるために、

「私は——あつくんみたいになりたかったんだ。誰にでも、迷わず手を差し伸べられる私の英雄ヒーローみたいに！」

小さく、自分に確かめるように呟いた。

瞬間、中指にはめた希晶石が、ひととき強く光を放った。

光に照らされて、影の触手は塵となって消滅する。

「そのために私は、エスフェールとして戦うことを決めただか  
ら！」

痛みが和らぎ、消えていく。

それだけではない。

「この、力——」

全身に力が漲っているのがわかる。

触手の戒めから解放されて、結乃は自らの両足で地面に立つ。

さっきまで、あれほど絶望的だったのに、不思議と——負ける気

がしなかった。

「なんだ……？ その、力は……」

クオルツが、はじめて狼顔に驚きを浮かべていた。

結乃を一撃のもとに吹き飛ばした剛腕の一撃が放たれる。

時間が加圧され、相対的に世界が減速する。先の一撃は見ることもできなかつたのに、今の結乃には緩慢な腕振りとして認識できた。

致命の一撃として放たれた剛腕を、結乃は余裕をもって回避する。意識の加速が終わり、世界が速度を取り戻す。圧迫された空気の刃が、衝撃となって結乃を襲うが、魔力障壁がそれを防ぐ。

「それが……アヴリル・アルマースの遺産の真なる力か！」

クオルツが、大きく後ろへ飛び退く。生まれた距離は十五メートルほど。

「その力、オレが手に入れる！」

先程までは本気ではなかつたのだろう。クオルツの足下から、先程の倍以上の数と速度、質量の水晶柱が生じ、結乃に殺到する。とてもではないが、先程までの結乃では避けるどころではなかつた。

しかし、

(見える……)

世界がスローモーションになっていた。いや、結乃が加速しているのだ。

一步、軽く踏み出すだけで、羽のように軽く身体が前へと進む。

右下、正面、右上、そして不意打ち気味に背後から。足下から噴出する水晶柱と水晶柱の間を、踊るようなステップで避けながら、結

乃は前へ。残り距離は十メートル。



その最期を見届けることもなく、結乃は晶に駆け寄る。

「あつくんっ！」

アスファルトの上に仰向けに倒れた晶は、目を閉じたままだった。胸は小さく上下しており、息をしているのは間違いないが、顔は青ざめて、とても無事であると言えるような状態ではない。

「絶対に、助けるから……！」

幻魔との戦いのあとで壊れたものを修復するのと同じように、結乃は晶の存在をイメージする。結乃にとっては難しいことなど何もないことだった。いつも、誰よりも強く思い描き続けてきた人なのだから。

「お願い、希晶石……」

結乃は祈るように両手を組んで、晶の無事を願った。

——お願い。あつくんを、助けて……！

その想いに応えるように希晶石が光を放ち、暖かな光が晶の傷を癒やしてゆく。全身の至るところにあった裂傷や、明らかにおかしい方向を向いた腕が時間を巻き戻すかのように修復されて、青ざめていた顔にもみるみるうちに血色が戻っていく。

ひとまずの危機を脱したことを確認して、結乃は大きく安堵のため息をつく。自分の中に生まれた安堵の大きさに、自分がどれだけ晶のことを想っているのか自覚してしまい、顔が一気に熱くなる。

「良かった……本当に……」

結乃の安堵に呼応するように、晶だけに注がれていた希晶石の光が周囲の町並みを修復してゆく。

乱立していた水晶の柱は光へと還元され、砕けた路面や壁が元通

りになっていく。

ものの十秒と経たないうちに、戦場の跡地のように荒れ果てた景色は、結乃の見慣れた通学路の姿を取り戻していた。それを確認してから、結乃は再び息をついた。

結乃の肌を覆っていた晶衣が光に還元されて元の制服に、桃色の長髪も栗色に戻ると、そこにいたのは聖晶希石エスフェールではなく、どこにでもいるただの恋する乙女だった。

あとがき

どうもADUです。

なんだかんだで毎年即売会には参加していましたが、ここ一、二年は行事や世情といった要因で参加できなかったり、そもそも開催されなかったりという日々が続きましたね。

今回は数年前からずっとずっと出したかったオリジナル変身ヒロイン本です。

期待していた堕ち展開が全然入ってないじゃないかと思われる方も少なくないかと思えます。

私としてもその期待に添えるようなものを書く予定なんです、ページ数やスケジュールの都合上、今回はここまで……もっと早く作業するべきでした。

ある程度省略してでも抜きどころを作る、一冊でまとめる、など考えりましたが、同人誌なのだから自分で作りたいように作るべき、と判断しました。

キャラクターデザインおよび挿絵は左藤空気さんをお願いしました。素晴らしいデザイン、イラスト本当にありがとうございます。

お願いして、最初にデザインをいただいたのがまだ平成だったので本当に永らくお待たせしてしまいました。

既に最終章までプロットはできているので、色々と片付き次第、続きを書いていく予定です。

随分ページ数残っているのにもうあとがきページ入ってるのなんぞと思う人もいるかもしれませんが、残りの半分はゲスト原稿にな

ります。

こちらはエロシーンオンリーとなっているのでご安心ください。いただいたイラストにはそれぞれ3ページの掌編をつけさせてもらっています。結果として6人×4ページでゲストページだけで24ページというちょっとした合同誌のような状態です。

こういうのはストーリー部分を本として出してから募るべきだったんじゃないかと思わないでもありません。

そんな状況で素敵なゲストイラストを描いてくださった小川小さん、Gゼロさん、ござるさん、大和さん、horosukeさん、渡辺SINKAIさん（五十音順）、本当にありがとうございました。

また、今回表紙・裏表紙の装丁デザインはかさね様に制作していただきました（Twitter：@ksn\_kasane）。素敵な装丁デザインありがとうございました。

妖蝶転生      ゲストイラスト…小川小

人は、誰しも利己心を持つ動物だ。

しかし同時に、人はそれを律する理性を持つ。他人を思いやる利他心を持つ。だから、身勝手な欲望を抑え込み、他者のために我が身をなげうつことができる。

結乃はそれがひときわ強い人間だった。

だからこそ、希晶石は彼女を選んだのだから。

だがそれは、結乃に利己心がまったくないことを意味しない。

三日前。

昆虫型の幻魔に敗北した結乃は、処女を奪われ、子宮に卵を産み付けられた。昼夜を問わず犯され続けた結乃の身体は、体液の持つ発情作用によって、処女を失って一晚と経たないうちに、幻魔の乱暴な抽送に甘い喘ぎを堪えられなくまでなった。加えて、幻魔の卵は時間を掛けて結乃の利己心を膨らませ、その心を蝕んでいった。

いかに結乃が強靱な精神力を持っていようと、限界はやってくる。早いか遅いか、それだけの違い。

そしてそれは、まさしく今このときだった。

結乃の中で膨らんだ利己心が、利他心の堰を破り、噴出する。

エスフェールの背中が、割れたかのように内側から闇が溢れる。

蛹から、蝶が羽化するように、正義のヒロイン、希望の象徴——エスフェールという蛹を脱ぎ捨て、ソレはこの世に生まれ落ちる。

変態

噴出した闇色の影が、ヒトの姿を形作っていく。造形されるのは、

エスフェールに酷似した、あどけなさを残す少女の美貌。艶やかな肌はむっちり肉感を帯びながらも、昆虫的な意匠を帯びた外骨格が継ぎ目なく融合している。美しくも禍々しい姿は、彼女に卵を産み付けた幻夢のそれによく似ていた。

「あ、は……」

形の良い唇の隙間から、桃色の舌が唾液を帯びたまま覗く。

そこに、一人の男が近づいてくる。本来、幻魔の結界の中に、一般人は侵入できない。結乃が喚んだのだ。

誘蛾灯に誘われる羽虫のように、男はおぼつかない足取りで結乃に惹き寄せられていく

「ねえ、あなた……」

結乃が呼びかけると、男の焦点の合わない瞳に意思の光が戻る。

「あれ……僕、どうして、ここに……ひっ……」

目の前に現れた怪物の存在に気づき、男は怯え声を漏らす。エスフェールとして幻魔と戦ってきて、そんな人々を救ってきた自分が、そんな反応をされることに、結乃は口元を吊り上げて笑みを作る。ガクガクと膝を震わせ立ち尽くす男へと、結乃は軽やかな足取りで、唇と耳たぶとが触れ合うほどの距離まで迫る。

「ねえ、キミ」

エスフェールから生まれたモノが、男に呼びかける。

同じ顔。

同じ声。

だけどそれは、エスフェールとはまるで別の存在だった。

耳元で囁かれたその声に、男がビクンッ、と全身に雷を受けたよ

うに背筋を伸ばす。結乃がぶるり、と肉感的な身を震わせると、形の良い豊乳が揺れ、甘い匂フェロモンいが拡散し、男の股間がジーンズの股間を勢いよく押し上げる。

「そっか……」

ふふ、と、結乃の唇が持ち上がる。

(——私、いつもみんなにそんな目で見られてたんだ)

エスフェールに対して、性的な欲望を向ける人々がいるのは結乃も知っていた。今やマンガにもなり、キャラクターとして認知されるようになったエスフェールだが、インターネット上では、卑猥な妄想や、アダルトパロディに溢れている。最初は、心ない人々の悪意で、そうじゃない人が大半なのだと思っていた。だけど、違った。そうする人々の大半は、エスフェールを嫌ってなどいない。むしろ、応援し、実在を信じ、願っている人たちほど好きだから、苦しみ、悶え、穢れ、堕ちてゆく姿を妄想していた。

「キミ、エスフェール私 のこと、エッチな目で見てたでしょ？」

「ひっ……ごっ、ごめんなさいっ！」

禍々しく生まれ変わった結乃の姿に、男は気の毒なほど足を震わせ、目を伏せる。しかしその視線が、太腿と太腿の生み出す肉の隙間に吸い込まれているのを、結乃は見逃さない。目の前に、自分の命を、息をするのと同じほどの気軽さで断ち切れる相手がいるというのに、女陰に視線を奪われる人間の浅ましさが、今の結乃には心地良い。

「ふふっ、怒ってなんてないから大丈夫。むしろ、キミにも良い思  
いさせてあげる」

「良い、思い……？」

伏せられた目が、喜色を灯して上げられる。粘つく視線が結乃の露わな巨峰を舐める。

「そ……♥ズボンの中、パンパンになって……苦しいでしょ？」

結乃の細指が、ジーンズの上から男の股間を撫でる。当然そんなこと、結乃はしたこともなかった。大好きだった品にでさえも。

しかし、今の彼女はもはやかつての結乃とは違う。誰だって、調理された料理を目の前に差し出されて躊躇などしない。

「あっ、は、いっ……」

膨らんだ股間を手のひらで包んで、撫でると、男はかくかくと頷きを返す。

「アレを見て」

結乃が示したのは、糸に絡め取られたままの自分自身だった。

結乃の魂は抜け落ちて、新たな幻魔へと転生した。しかし、抜け殻にはまだ魂の残滓が残っている。幻魔ゆのまが不要として捨て去った、人としての正義感、使命感、倫理——それら残り滓が、エスフェールの肉体に残っている。

「私の前の身体……アレを、犯していいよ」

「エス、フェールを……」

荒い呼吸を繰り返すこと、匂フェロモンいを吸い込んで、男の興奮が加速されるのが血走った瞳でわかる。あと少し、あとほんのひと押しすれば、彼の理性は崩壊する。

「犯、す……」

正義のヒロインを穢す——そんな人倫に悖る行為をとろうとする

のを、理性が抑えようとする。欲望と理性が、男の中でせめぎ合う。「そう……そのチンポで、犯して……ヨガらせて……性奴隷に仕立てあげてもいいの」

囁きながら、と結乃は男に吐息を吹きかける。

それが最後の一押しだった。

「ふふ、もうズボンなんていらぬよね」

結乃の鉤爪が、男のズボンを切り裂く。しかしもはや男はそれに怯えることもなく、糸に絡め取られたエスフェールに突進していく。

「あ……い、や……」

猿轡のように噛まれた糸の隙間から、拒絶の声が漏れる。

エスフェールであったモノの残滓——抜け殻となった少女が、弱々しく首を振る。

しかし、抵抗はそれだけだ。全身を固定する糸に絡め取られて、彼女は身動きひとつできない。もはや、エスフェールに幻魔と戦う力は残っていない。それどころか、今のエスフェールには性欲に支配された男一人はねつける力もない。

男は興奮した様子で、糸に吊られて、肉付きの良い尻を突き出す姿勢で固定されたエスフェールの背後にまわる。

「うわあ、ほ、本物の、エスフェールだ……」

男の指が、その尻を鷲掴みにする。

「あ……」

太い指がぐにゅんと尻肉に食い込み、男の劣情を余計に煽る。

「すごい、エロい……怪物に、犯されたのかな……」

「ええ……幻魔に負けて、ずっと犯され続けたの。好きな男の子に

いつかあげようと思ってた処女も奪われて、幻魔チンポでヨガリ狂っちゃう淫乱マンコにされちゃった……♥

他ならぬ本人の解説で、男の興奮はさらに盛り上がっていく。

「ほら、晶コスチューム衣のオマンコ部分、ズラしてみて？ キミに強姦レイプしてほしくって、ぐちよぐちよになってるはずだから」

「むう……むうっ……」

エスフェールがどれだけ首を振ろうとも、男の耳には入っていない。

「はい……」

男はエスフェールの尻を鷲掴みにする右手を離し、晶衣のクロツチに指を掛けた。ごくりと生唾を呑み込んでから、競泳水着のような質感のそれを、鼠径部に引っかけるように横にズラす。

「う、わ……すごい……」

むわあ、と。香り立つほどの牝の匂い。それこそプールに入ってきたと言われた方が自然なほどに濡れた割れ目は、しかし単なる水ではありえない、粘ついた光沢を帯びて男を誘惑する。

「ほら、綺麗なオマンコでしょ？ 幻魔には犯されてどんなチンポでも啜え込めるようになってるけど、人間ではキミがはじめてだよ♥」

「エスフェールの……はじめて……」

「そう……はじめて♥ だから、その抜け殻たわしのこと、たっぷりヨガリ狂わせてあげてね」

絡め取った蝶を捕食する蜘蛛のように——男はエスフェールに襲いかかった。



太陽が沈み、昼が夜へと移り変わるその時分を逢魔が時と呼ぶ。かつて、夜闇を照らすのは月と星の明かりと、せいぜい手持ちの提灯程度。夜闇は人の目を遮り、当然のように犯罪の多い時間帯でもあった。それが転じて、人の欲望が解放される時間ともされた。

昼から夜へ、現世うつしよと幽世かくりよを繋ぐ時——大禍時。

つい先ほどまで、福江成美にとつて、世界は安全な場所だった。

退屈な授業を終えて、大好きな兄おにいちゃんを待って、一緒に下校する。それが、友人たちから、いささか兄好きが過ぎると言われる福江成美の日常だった。

夕焼けの住宅街を、ひと組の男女が並んで歩く。

青春漫画のワンシーンのようなその光景に成美が、他人から見れば、恋人同士カップルのように見えるのだろうか、などと思っていたときだった。

世界は、一瞬で塗り替えられた。

夕焼け色だった空は、まるで大量の血を溶かしでもしたかのようになつて、そこに最早、成美のよく知る安全な世界でなくなったことを物語っているかのようだった。

一瞬で異界と化した世界には、住人が存在した。あるいはそれを住人と呼ぶのは相応しくはなかったかもしれない。

頭あたまの先から足先までの体しんちよう、高はゆうに二メートルを超える。直立二足で、概形こそ人型ひとがたでこそあるものの、それ以外の部分で、それを人と呼べる要素はなかった。

巨体の至るところから、どこか卑猥な無数の触手が生え蠢いている。それだけで、常識の範疇にある生物でないことは明らかだった。灰色みがかつた血色の悪い肌や触手の表面には、赤黒い無数の血管が這い回っている。まるで肌の表と裏を裏返したような異形。

「くひ、ぐひひひひひ」

異形の怪物が、どこにあるかもわからない口から、笑い声に似た不気味な鳴き声を漏らす。

「おっぱいデッカ……ラッキー」

変声ボイスチェンジャー機を通したような奇妙なエコーこそかかっているものの、流暢な日本語だった。どう見ても人ならざる存在が、流暢に言葉をお話するという事実は、相手が言葉も通じない野獣であるよりも、遙かにおぞましい、悪い冗談のような光景だった。

「いただきマアす」

不気味な触手が鳴海に向けて、明確に下卑た欲望を持って伸ばされたその時、

「なんなんだよ、お前……!!」

まるで物語フィクションの主人公ヒロインの如く、成美を庇うようにして、兄おにいちゃんが前に出た。その行為に、不謹慎にも成美の胸が高鳴る。しかし、

「邪魔ダよ、オ前」

成美に伸ばされていた触手が、風を切って振られる。兄の身体がトラックにでも撥ねられたような勢いで吹き飛ばされて、背後にあったコンクリート塀へいに叩きつけられる。

「がはっ……」

兄の口から、苦鳴と共に、血が溢れ出す。塀は、発泡スチロール

できていたかのように呆気なく崩れ、兄の身体に降り注いで全身に痛々しい傷を作っていく。

「お、にいちゃん……？ 嘘……」

悪夢のような光景なのに、目の前で起こる出来事は、それが単なる夢だと現実逃避することを成美に許さないほど、あまりにも鮮明だった。

「嘘じゃなくって、現実だよ。邪魔者モ静か二なつタコトだし、お楽シミとイこうか」

怪物の腕とも、触手ともわからないモノが成美の右腕を掴み、強引に抱き寄せる。目の前で起きた非現実的な出来事に、成美は動くこともできないまま、触手に羽交い締められる。

「だあいじようブ。すぐに気持チ良くツテ、あんなゴミなんかドーでモよくナルよ」

両腕だけでなく太腿に、足首に、触手が絡みついて、成美の肢体を宙づりにする。肉感的な太腿に、体粘液を塗り込むように触手が食い込む。蝟のような弾力のある感触が肌に伝わる。

触手が、成美の胸の膨らみをシャツの上からしばらく撫でてから、無理矢理に剥ぎ取る。ボタンが弾け飛び、桃色の下着ブラジャーと豊かな乳房が露わにされる。

「嫌っ！ 嫌！ 嫌ああああっ！」

その段に至ってはじめて、成美は悲鳴を上げた。だが、その程度で怪物が獲物を手放すはずもない。

「柔らかいナァ……ぐひひひ」

左の乳房をねぶるように、触手が下着から引っ張り出す。下着の

中に押し込まれていた肉感が触手に引っ張られると、スライムのように柔らかな乳房が卑猥に変形する。

「んっ、あっ……いやっ、あっ、いやあああっ！」

「うっワ、エツロい長乳……ぐひっ」

ぐにゆり、ぐにゆりと、触手がまるで指のように器用に蠢いて、成美の巨乳を揉みしだく。無遠慮で下品な手つきだというのに、そのひとつひとつが的確に成美の気持ちの良い部分を刺激して、どうしても声が漏れ出る。

「お兄ちゃんのこと、好きかい？」

成美の乳房を遊びながら、怪物が問いかける。

「え……？」

「答え口よ！」

怒気を帯びた促しに、成美はこくこくと頷く。

「ジャあ、抵抗シナイでネ。そうシタラ、お兄ちゃんのコとは殺さナイでアげるヨ」

「本当、ですか……？」

「本当だよ。けヒっ」

「わかり……ました……」

成美は怪物の言葉を信用したわけではなかった。だが少なくとも、逆らえば兄がどうなるかは明確だった。恐怖のあまり、今にも爆発してしまいそうなほど激しく脈打つ心臓をなんとか抑えつけて、成美は己の身を差し出す。

「それじゃあ、こウ言ウンだ——」

どこから出ているのかもわからない声が、耳元で成美に囁く。そ

の卑猥な内容に、成美は背筋に怖気を走らせつつも、従わないわけにはいかなかった。

「バカ、みたいに……おつきな……デカチチ、で……誘惑して、申し訳、ありません……」

その調子だ、とでも言いたげに、触手が成美の乳房を搾り、変形させる。

「ひゃうっ、んっ、あ……はあ……」

体液の触れた場所から、熱が成美の全身へ伝播していく。まるで兄と二人きりの時に感じるような、甘い恋の気持ちにも似た胸の高鳴り。ただただ気持ちが悪くて仕方がないはずの触手の感触への嫌悪が、少しずつ薄れてきていた。代わりに、肌を撫で回されるたび、甘い疼きが全身に走る。

「おね、がい……します……」

他の触手と比べても明らかに硬いそれが、尻に押しつけられて、成美の股の隙間から、内股を擦りながら前へと突き出される。

全身と同じ、赤黒い不気味な血管に覆われた男性器は、成美の想像していたよりも、ふたまわり以上は大きく、グロテスクだった。

実際に目にして改めて、これから自分が口にする言葉の意味を反芻する成美の顔面が蒼白になる。

「ホら、笑ッテ、続ケテ」

か細い声を搾り出すように、成美は言葉を続ける。

「デカチチ、JKの……お、おまんこに……お、ちんぽ、挿入れて、ください……」

震える唇を、ぎこちなく笑みの形に上げて、成美は言い終えた。

羞恥と嫌悪で身体が震える。悲鳴こそ押し殺しても、感情を完全に抑えることはできなかった。大粒の涙が、愛嬌ある両目からこぼれ落ちるのを、怪物の触手が舐めるように掬っていく。

「今度こそ、イタだきマアす」

お気に入りだった下着を引き裂いて、怪物の巨根が成美を貫く。

前戯もなにもしていないはずなのに、成美の入り口は充分すぎるほどに潤っていて、巨根を簡単に迎え入れた。破瓜の痛みすらなく、成美が感じたのは強烈な快感だった。

「あっ♥ あっ♥ あああああっ♥」

痛みでも嫌悪でもなく。快感のあまりに成美は悲鳴を上げた。頭の中が真っ白に染まる。自分が絶頂に達したことすら、成美は遅れて気付いた。

いともたやすく失われた処女性にシヨックを受ける暇もなく、抽送がはじまる。成美の地獄は、はじまったばかりだった。

\*

全身に激痛を感じながら、男は目を覚ました。

「んっ♥ ふうっ♥ ふうっ♥ ふうううっ♥」

聞き慣れた声に視線を向けると、そこには地獄があった。まるでAV女優のような下品な喘ぎを上げながら、膣を、乳首を犯される妹の痲態。どれほど陵辱が続いたのか、愛嬌ある瞳からは光が抜け落ちて、ただ生理反応として啼いているだけ。

あまりにも無残な妹の姿に手を伸ばしても——その手は届かない。



まが、いいもの　ゲストイラスト…ごさる

学校帰り、古崎菜穂子にとっての日常は、あまりにも呆気なく崩れ去った。

菜穂子は、追われていた。

それも、変質者や犯罪者などではない。菜穂子を追いかけているのは、いまやこの街の誰もが知る正義のヒロイン、聖晶希石エスフェール。

菜穂子も完全に品行方正というわけではない。つい魔が差せばゴミのポイ捨てや信号無視くらいはする。とはいえ、噂の正義のヒロイン直々にお仕置きをされるほどの悪行を成した覚えはない。それに――

「イ……ヒイ♥ カワ、イイ、コ……♥ ミツ、ケタア♥」

人々の希望の象徴たるエスフェールは、知性も品性も感じさせない片言で菜穂子を追い詰める。

聖晶希石エスフェール。そう呼ばれるヒロインを菜穂子が目にしたのは、はじめてのことだった。もちろん、漫画化していることは知っているし、雑誌でも多く取り上げられているため、存在は知っている。しかしそれは、言うなればネス湖のネッシーのような認識。実在するなど本気で信じていたわけではなかった。

「なんで、エスフェールが私を……」

薄桃色を基調とした競泳水着のようなコスチュームデザインは、確かに雑誌で見かけるエスフェールのそれによく似ている。しかし、目元は黒い、泥のようなもので覆われて見えない。コスチュームの

ところどころは純白ではなく、エナメル質の光沢を帯びた黒色で、禍々しくもある。菜穂子の抱くエスフェール像とはかけ離れていた。極めつけは短めのスカートの前を押し上げて露出した巨根<sup>ペニス</sup>。彼女自身や菜穂子の二の腕よりも太く、形状も、人間の男性のそれと比べて明らかに凶悪な形状をしている。豊満な胸元とのギャップが、その異様さを際立たせていた。真っ黒な汚泥のような先走り<sup>先走り</sup>が、垂れ下がった巨根の先端からたらたらと滴って、足下に黒泥の水溜まりを作っていく。

そんなものをぶら下げているものが、正義のヒロインであるなど、菜穂子には信じられなかった。少なくとも、今この瞬間、菜穂子を恐怖から救ってくれる、救い手ではない。

「いや……」

逃げようと踏み出した菜穂子の右足が、エスフェールの足下から広がる水溜まりに触れた。

瞬間、菜穂子はその間に、足を取られる。つい先程まで、そこに水面はなかった。彼女の股間に鎮座する肉棒から溢れ出す、黒い泥のような先走り<sup>先走り</sup>が広がったものだった。黒ベタのインクを路面にぶちまけたような水面は、たとえその液体がどのようなものであるとしても水溜まりでしかなく、足を取られることなんてあるわけもない。――はずだった。そんな深さがあるはずもないのに、菜穂子はその水溜まりに、膝まで一気に沈み込む。抜こうとしても、水溜まりは悪意を持っていてかのように、菜穂子を捕らえて放さない。

「嫌あつ！」

エスフェールは、助けを求める人の前に現れてくれるはずではな

かったのか。信じてもいなかった噂に毒づきながら、菜穂子は必死に脚を引く張る。

「アナタ、モ……♥ エス、フェール、ニ……♥」

にへら、と口元を緩ませて、怪物が追いついてくる。形の良い鼻梁と整った口元は、顔全体は見えずとも、彼女が美人であることを物語っていた。

だからといって、菜穂子の恐怖が弱まるわけではない。むしろ、顔半分の隠れた、変態じみた衣装の美女に追い回されるなど、そこらの変質者に追われるよりも遙かにホラーな体験だった。

エスフェールがヘコヘコと腰を前後させるたび、その大ぶりの双乳がたゆんつ、たゆんつ、と暴れる。

「ア、ヒツ♥ イヒツ♥」

締まりのない口元から下品な声を漏らしながら、エスフェールはビクビクと身体を痙攣させる。その反応がなんなのか、菜穂子にはわかった。

(この女性……絶頂してらんだ……)

目元こそ見えないものの、口は開いて舌は投げ出され、弛緩した表情を見せている。菜穂子の予想を肯定するように、断続して甘く下品な喘ぎが、小ぶりの口から溢れていた。

これまでの人生で経験したこともないような恐怖を感じながらも、その一方で菜穂子は不思議と、彼女を羨ましいと感じていた。

沼に足を取られた菜穂子に、逃げるすべはない。

エスフェールは大きな両手で菜穂子の両腕を掴むと、グロテスクな巨根を菜穂子のスカートの下へと滑り込ませた。

(あんなのに、犯されるっ……!)

女性としての本能的な恐怖と嫌悪に、菜穂子は身を震わせる。

そんな菜穂子の内心などお構いなしに、エスフェールは菜穂子の上体を地面に押しつけると、股間に亀頭の先端を押し当てて。ぐじゆう、という淫猥な水音は、肉棒の先端から溢れ出す黒い泥が生んだ音だった。菜穂子のショーツに、泥が染みこむ。

「んひいっ!」

敏感な花弁に泥が触れると、焼けるような灼熱感が菜穂子を襲った。だがそれは苦痛ではなく、快感だった。エスフェールは菜穂子に泥を擦りつけるように、ぐいぐいと腰を突き出す。みるみるショーツは泥に染まり、菜穂子を苛む責め具となった。

「なに、これっ……」

菜穂子は、自分の身に起こっている変化が理解できなかった。わかるのは、自分がこれから犯されることと、自分の身体が、それを望んでしまっていること。

エスフェールが泥染めのショーツを乱暴に引き千切る。菜穂子の秘部が、公衆の面前へと晒される。泥によって濡そぼった花弁へと、グロテスクな肉槍が押し当てられる。

直接触れると改めて、

「う、そ……無理、無理よ、そんなの、入るわけ……」

言葉とは裏腹に、菜穂子にはわかっていた。あれは、挿入ののだと。黒の泥と、菜穂子自身が分泌した蜜、その両者を潤滑液に、二の腕ほどもある極太の巨根は、一気に根元まで菜穂子を貫いた。

抵抗は、さほどなかった。

エスフェールは、しばらく菜穂子を犯し、その子宮に泥沼を構成するのと同じ、黒濁液を注ぎ込むと、現れたときと同様、夢遊病患者者のような足取りで去っていった。

後に残されたのは、黒泥の沼に、その身を半ば沈めたままの菜穂子だけだった。

全身が、陵辱による快感の余韻で動かない。

注ぎ込まれた黒濁液が、子宮に根を張っていくのがわかる。ナニカが神経を汚染して、菜穂子という人間の全身に拡がっていく。

ぞわぞわわあ、と。背筋を悪寒が駆け上がる。しかしその感覚を追いかけるように、甘美な快感が走る。

「あ……」

黒泥は重力に逆らって菜穂子の身体を這い上がる。薄い膜状になった泥が菜穂子を包み、覆っていく。生温かい泥に包まれると、言えないような不快感が生まれ、それを快感が上書きする。

耳の中に、黒泥が侵入してくる。

ぐちゅう、ぐちゅうと、黒泥が耳孔の中で蠢く。まるで腔内を愛撫されるような快感に、菜穂子の意識は塗り潰される。恐怖も嫌悪もすべてが消えて、身体の中を這いずり回る泥の意思に従う。

——キミハ、ナニカナ？

菜穂子の頭の中で、あるいは、全身に、声が響く。

聞き覚えのない、だけどたまらなく愛おしい、男性の声だった。

それはあるいは、一目惚れという感覚に近しかったのかもしれない。その顔を、姿を、想像しただけで大量の愛液が股座から溢れる。

「わた、し……わたシは……」

名前も知らない、姿も知らないその存在が、どう答えれば喜ぶのか、その答えが頭に浮かぶ。

「エス、フェール……♥」

菜穂子は自分の存在を、自分自身で定義する。

その解答を、正答とでも言わんばかりに、菜穂子の全身に強烈な快感が走る。その快感に菜穂子が身震いすると、セーラー服が泥に覆われ、布地に泥が染みこんでゆく。

——変身。

そう呼ぶに相応しい変化だった。

菜穂子が黒泥の沼から抜け出した頃には、菜穂子は、彼女を襲った怪物と同じ姿となっていた。エスフェールのようなコスチュームと、重たい巨根。身長や体格、胸の大きさに髪の毛の長短、様々な点で差異はあるものの、概形としては同質だ。

視界は泥に覆われているものの、不思議と見えているのと変わらずに視えていた。それどころか、前後左右上下を問わず、全周が視える。ただそこにいるだけで、快感が与えられる。もはや菜穂子には、黒泥の与える快樂以外不要だった。

——サア、キミモ、アタラシイ、エスフェールヲ、ササゲテクレ。

「ハイ……ゴシユジン、サマア……♥」

全身に響き渡る主人の指令にそう返しながら、菜穂子であった怪物は夢遊病患者者のような足取りで歩き出す。褒美のため、新たな獲物を探し出すために。



御珠駅前の繁華街から少し駅とは反対側に進むと、性風俗街が広がっている。

キャバクラ、セクシーパブ、ソープ、ピンクサロンにホストクラブ。様々な風俗店が立ち並ぶ一角に、そのホテルはある。名目としてはごく普通のビジネスホテルだが、その立地から、実質的にはほとんど連れ込み宿として使われている。もちろん今日、この日も、その一室はそうした用途で使われていた。

部屋の中心、どう考えても一人で使うためではない大型のベッドの上に、一人の少女が座っていた。

桃色の長髪に、ぴっちりとした肌に張りつく競泳水着にも似たインナースーツ。ビスチェにも似たアウターとフレアスカートは純白。その姿は紛れもなく、巷で話題の変身ヒロイン、エスフェール。

ユナ、というのが彼女の名前だった。もちろん本名ではないだろう。男女のマッチングサーブिसー——いわゆる出会い系と呼ばれるアプリの登録名なのだから。

本名はわからない。無理に詮索するつもりもない。知っているのはユナという登録名と、真偽も怪しい登録情報だけ。M学園の高等部二年生。明記こそされていないものの、この辺りでM学園といえれば御珠学園以外にはない。

桃色の長髪はウィッグなのだろうが、ポリエチレンの安物とは違って本物の髪と見分けがつかない。スーツの質感も安物のコスプレとは大違いで、いくらかかっているかは検討もつかなかった。一方

で、思わず視線を吸い寄せられる爆乳部分は開かれて、ぷっくりと乳輪ごと勃起した淫猥な乳首も丸見えだ。

元々が都市伝説であるエスフェールは、媒体によってコスチュームのデザインも異なっている。しかし彼女のコスチュームは、私の知るどの媒体よりも、本物らしく見えた。

衣装の出来も、彼女自身の美貌も、驚くほどに高い。もしエスフェールが実在するのであれば、きっと彼女のような容姿だろう。

彼女のような美少女が、私のようなコスプレ好きの中年親父の誘いに応じたのか、まるで理解ができない。

いや、理由自体はなんとなく想像もつく。

時折、いるのだ。もっとならずと性格や容姿に優れた男性を選べるはずなのに、我々のような太った中年男との性行為に倒錯的な快感を覚える変態が。

その証拠に、部屋にいるのは私とユナの二人だけではなかった。

私と同年代の中年男性が、私以外に三人。きっとユナからすれば父親と同じか、それより年上だろう。

輪姦希望。そう彼女はマッチング条件に記入していた。

つまり彼らは、キンタマにたっぷり溜め込んだ中年ザーメンを、ユナの衣装に、爆乳に、口に、膣に、ぶちまけるために集まった今日限りの穴兄弟なのだ。

「ど、どういう設定でしょうか」

口火を切ったのは、ステロタイプのオタクそのものという印象の男だった。キャラクターになりきってシチュエーションを定める、イメージプレイが好きなのだろう。私も決して嫌いではない。彼女

のようなコスプレイヤーを相手にするならなおのこと。

「そうですね……」

オタクの言葉に、ユナがふふ、と小さく微笑む。ちろりと覗く桃色の舌は妖艶で、彼女が学生だとは到底信じられなかった。彼女を取り囲む他の二人も同じ事を感じたようで、大ききやカタチは違えど、性器をギンギンに膨らませていた。

「エスフェールは、幻魔に負けて、犯されちゃうんです」

ゆつくりと、絵本を読み聞かせる母親のような口調でユナは言葉が続ける。

「最初は嫌だったけど、犯されるのは気持ち良くなって、否定しても否定しても、気持ちいいのが否定できなくなってきた……それでも、その幻魔はなんとか撃退するんです」

三人とも口を挟むこともできずに、ユナの言葉に耳を傾けていた。「だけど、エッチになった身体は治まらなくて、男の人を誘って、エッチする……そんな悪い子になっちゃうんです」

今、この場で思いついた設定シナエーションには思えなかった。

「スケベなおじさまたちに輪姦マワしてほしくって、出会い系アプリを使っておじさまたちを呼び出した……って——」

まるで——そうまるで、自分に起きた出来事であるかのように、彼女は語り終えると、私たちに微笑みかけてくる。

「——そんな設定、どうですか？」

異論などあるはずもなかった。間抜けな顔で頷く私たちを、捕食者のような笑みで見上げて、ユナは寝台に背を預ける。華奢な指が短いスカートをたくしあげると、股間を覆っているはずのハイレ

グクロッチはどこにも存在しなかった。

ピタリと、真一文字に閉じた秘所は一本の毛も生えていない。この場にあまりに場違いであるものの、不思議と清楚さすら感じさせた。一方で、その花卉の内側からは透明な花蜜が、おもらしでもしたかのように大量に溢れ出て、彼女の期待と興奮を表していた。

「ねえ……おじさまたち……」

ごくり、と。私を含む四人の男たちが一様に生唾を呑む。

「私の——エスフェールのおまんこに、勃起オチンポぶち込みたいんですよね？」

ユナの右手、人差し指と中指が、自身のピタリと閉じた花卉の両側を押さえて、開く。ぐちゅう、と内側に溜まっていた大量の愛液が滲み出す。その淫乱さとは裏腹に、露わになった内臓うちがわは処女のような薄い桃色で、インモラルな倒錯感を覚える。

「良いんですよ……♥ チンポだけで男性オスを選ぶ淫乱ヒロインのおまんこ、壊れちゃうくらい犯してください♥」

正義のヒロインどころか、人を墮落させる淫魔のような甘い声で、ユナが男オスを誘う。

男たちは全員、服を全て脱ぎ捨てて、一匹の獣と化す。

誰が最初に挿入するか、互いに視線で牽制しあっていると、ユナが待ちきれないとばかりに全員の股間を品定めしていく。

「じゃあ、一番チンポのおつきな……おじさまから♥」

指名されたのはオタク男だった。不服を覚えながらも、本人の使命を無視するわけにもいかなない。

「や、やったっ。ひひっ」

オタク男はユナに襲いかかるように覆い被さると、丸出しの爆乳に指を埋める。勃起した肉棒を、ユナの割れ目に押し当てながら、オタク男はユナの爆乳の感触を揉みしだく。相手を悦ばせようとする愛撫ではなく、無理矢理にでもその感触を味わうための乱暴な行為。見ているだけで柔らかさが伝わるほど、爆乳が大きく変形する。

「すごい……こんな柔らかいおっぱいはじめてだ……」

「あんっ♥ 乱暴におっぱい、揉まれるの、好きいっ♥ でもおっ

♥ おまんこにもお、中年デカチンポください♥」

「ユナちゃんは、本当に淫乱なんだね……」

「はい♥」

「純粹にエスフェールのこと応援してるファンに謝りなさい。チンポ欲しさにエスフェールのコスプレして援交なんかしてごめんなさいって」

オタク男が要求すると、その言葉を言うことを想像して興奮でもしたのか、ユナの身体がぶるっと震える。

「変態中年チンポ欲しくって、みんなの憧れの正義の味方の格好してチンポ漁りなんてしちゃってごめんなさいっ♥ 変態オタクさんの中年デカチンポでお仕置きしてください♥」

言い終えるが早いのか、オタク男がユナの秘所に勃起肉棒をブチ込んだ。

「あっ♥ あああっ♥ チンポっ♥ オチンポきたあっ♥」

明らかに平均よりも大きな肉棒が、いとも容易くユナの腔内に収まり、代わりに押し出された大量の愛液が飛び散る。

「こ、れ……すごっ……」

オタク男の顔が恍惚に歪む。挿入しただけだというのに、どれほど気持ちが良いのか、だらしのない声まで漏らす。

「な、なあ……見てるだけなんて、我慢できないよ……手でシてくれないから……」

もはや我慢も利かずにそう問いかけると、私はユナの右手をとって、肉棒を握らせる。キメ細かな手袋の布地が、びたりと肉棒に吸いついてくる。ユナがしゅっ、しゅっ、と手を上下させると、まるで腔に挿入しているかと錯覚するほどの快感が生まれる。

「ユナちゃん、動くよ」

挿入したオタク男が確認をとろうとすると、ユナはあどけない顔立ちに一瞬、不服そうな色を浮かべてから、なおさら妖艶に歪める。

「おじさまたちは、性玩具に使ってもいいか、なんてわざわざ聞いたりするんですか？」

その答えて、全員が欲望を解放させた。

オタク男は、ユナを壊してしまわないか心配なほどの勢いで、腰を打ち付ける。そうされながらもユナの右手は私の分泌した我慢汁を潤滑油にして、巧みにグラインドを再現する。

もう一人が口元に肉棒を差し込むと、ユナの桃色の舌がいきり勃った肉棒に吸いつく。粘り気を帯びた唾液が、ねっとり肉棒に絡みつく。

「んっ、ちゅっ、んむっ♥」

愛おしそうに、ユナは甘い声を漏らす。蕩けた蜜のようなその声が、余計に劣情を煽る。

淫らな狂宴は、朝まで続いた。



噴乳牝牛エスフェール ゲストイラスト…horosuke

「さて、真珠のエスフェール」

クオルツが、結乃の頭に手をかざす。瘴気が手のひらに集中したかと思うと、結乃の頭の中に流れ込んでくる。

「嫌っ、やめてっ、頭の中につ……」

頭の中に、映像が浮かぶ。咄嗟に目を閉じてても、視覚的な情報というわけではなく、拒むことはできなかった。

右手中指に嵌めた希晶石が薄暗い桃紫の光を放ち、結乃の全身を包み込む。エスフェールに変身するときとよく似た現象。

光が結乃から剥がれ落ちたとき、結乃の身体を包む晶衣は姿を大きく変えていた。

「え……なに、これ……」

胴体部分は消滅し、残ったのは両手を覆う長手袋と、太腿の半ばまでを覆うレギンス。本来は白を基調に桃色のラインの入るそれらは、白地に黒い雲状の模様が入る乳牛柄に。胸元の大玉真珠は、家畜の首につけるようなカウベルの中心に据えられ、頭飾りにも短い角と耳の意匠が追加されていた。その上、尻尾を模したアナルプラグが結乃の尻孔に埋まっている。

「私に……何をしたの……」

「わからないのか？ 俺がしたのはただ、思念を送っただけだ」

「それだけでこんなこと……」

「そうとも、それだけでお前の晶衣をどうこうできるわけがない。

流石はアヴリル・アルマースの遺産。残念ながらお前に快楽を刻み

込むことで随分と濁ってはきたものの、未だに干渉を拒んでくる」

「じゃあ、一体何をしたっていうの？」

「言っただろう？ 俺には何もできていない。そして希晶石に干渉できるのは、希晶石そのものが認めた適合者のみ。つまり、お前の姿を変えたのはお前自身だよ、真珠」

「どういう意味……」

「お前は無意識のうちに、俺に媚びるために変身したってわけだ」

「嘘……」

「嘘じゃない。お前も、本心ではわかっているんだらう？」

肉壁がぐによりと不気味に蠕動し、触手が伸びる。お椀状に凹んだ先端の内側には、無数の襞が蠢いており、この一週間、クオルツによる調教を受け続けてきた結乃には、それがどのような役目を果たすものなのかすぐにわかった。

「あっ、嫌、ダメっ！」

拒絶の言葉を、しかしクオルツが受け入れるはずもなかった。触手の先端が、結乃の豊乳を啜え込む。

「んひいっ♥」

乳首が、乳輪が、乳房が、同時に舐め回されてしごかれる甘美な感覚。巨乳はじんじんと痺れ、内側から張っていくような異物感が大きくなっていく。

「そういえば、牛は発情していると尻尾を上げるそうだ」

括約筋によって固定された尻尾は、まるでその言葉を肯定するかのように上向きで止まっている。もちろん、それは本物の牛の話であって、尻尾状の玩具とは何の関係もない。そのはずなのに、自分

が発情しているのだと、ピタリと言い当てられている気分になる。

「くくく……イけ、結乃」

クオルツの言葉の直後、乳を苛む肉褌が暴れる。乳の先端から電流が逆流し、結乃の脳を焼く。

「あつ、あああつ、イクつ、イクイクイクウウウツ！」

バチバチンツ、という恐ろしい音が頭の奥で響き、絶頂感とともにその背を大きく仰け反らせる。

閉じていた弁が開け放たれるように、胸の奥から張り詰めた感触が弾けた。仰け反る身体に追従して、大きく揺れる巨乳の先端から、白濁した乳液が飛び散る。

「にゃに、こりええ……♥」

ぷしゅつ、ぷしゅつと、牧場の乳牛がそうされるような勢いで、母乳が流れ出す。胸の先から、理性そのものが流れ出しているのかと錯覚する強烈な快感。

（男の人の、射精って……こんな、感じなのかな……）

とりとめもない思考が、白んだ思考に生まれては流れ出す。

数十秒の間を置いて、たまらない快美感がようやく収まってくる。

「乳まで嘖くとは、本当に乳ホルスタイン牛じゃないか」

「ち、ち……？ 嘘、でしょ……だって、私……妊娠なんて、してない、はずなのに……」

希晶石の加護によって、妊娠は避けられているはずだった。しかし、もしかしたら、という恐怖に結乃の背筋を冷たいものが走る。

「希晶石がお前の願いを叶えた結果だろう。その牛のように下品でいやらしい乳で気持ち良くなりたいたい、とな」

「そんなこと……」

「考えたこともない、などと言い切れるのか？」

言葉の続きを先読みされて、逆に問われる。

「そ、それは……」

もはや結乃には、自分の無意識すらも信じることはできなかった。

「また乳が張ってきているみたいじゃないか。さっきも随分と気持ちよさそうな顔をしていたしな。また射乳だしたいんだろう？」

クオルツの言葉のとおり、つい今しがた乳を噴いたばかりだというのに、乳の奥からだくどくとしたものがこみ上げて、内側から張り詰めていた。興奮の度合いを示すようにぶつくりと膨らんだ乳輪からは、じんわりと母乳が滲み出している。

（さっきの……すごかった……おっぱいから、脳みそ全部蕩けて流れていっちゃう、みたい……）

もう一度射乳したら、どれだけ気持ち良いだろう。結乃の内側、

確かに育まれてきた淫らな自分が、耳元で誘惑を囁く。しかし、

「そんなこと、ない……」

結乃は意志力を振り絞って、否定の言葉を口にした。

「そうか。では、素直になるまで最後の躑けとこう」

クオルツが、ぎゅう、と虚空を握り締めるように拳を握ると、

「んひいっ♥」

結乃の双房を覆う触手が、その動きに追従して乳を搾る。既に限界近くまで張っていた乳房が、二度目の決壊を迎える。

ぷしゅううっ！ その勢いに乳腺が拡張されたのか、一度目よりも明らかに勢いよく、母乳が嘖き出す。一度そうやってしまえば、

結乃には止めようもない。快感が乳を、全身を、脳を駆け巡って融かしていく。目の前が白と黒とを往復する。

「あっ♥ ああっ♥ あはあああああっ♥」

否定するにも無理のあるはしたない声が、触手に覆われた室内に響く。大きく仰け反る結乃にあわせて、首のカウベルがカラン、カランと音を立てる。

「はあ……はあ……はあ……あっ♥」

「良い表情だぞ、結乃。とびきりスケベな牝牛の顔だ」

「わた、しは……負け、ない……」

「その強情がいつまでもつかないかな？」

ぬらぬらと光を照り返す触手の先端が、結乃の秘所と肛門の両方にあてがわれる。

「いやっ、ダメっ、イッたばかりなのっ……」

結乃の拒絶を、クオルツが聞き入れるはずがなかった。クオルツが口端を吊り上げ、笑みを深くすると同時、触手が結乃の入口をこじ開ける。噴乳絶頂によって、結乃の意思に反してたっぷりと蜜を帯び蕩け花卉が、血管の浮かび上がる太い触手を軽々と啜え込む。

「んあっ♥ ちんぽっ♥ しょくしゅちんぽ嫌あっ♥」

どれほど心で拒絶していても、クオルツによる調教を受けた今の結乃は異形の挿入を拒むことはできなかった。

ずぶう、という淫猥な音を立てて、触手が結乃の内側へと挿入していく。普通の人間との性行為では決して届かない、身体の奥の奥まで貫かれる快感が結乃の理性を焼き付かせる。膣内壁の肉襞の一枚一枚が、無意識のうちに触手ペニスに絡みつき、快感を与えよう

としてしまう。

「嫌だと言う割に、とても嫌だという表情と声じゃないぞ」

嘲弄の言葉に、どうにか毅然とした表情を取り繕うとするものの、無駄な抵抗だと言わんばかりに内側から張り詰めた乳房がぎゅうと搾られる。頭の中が真っ白に染まって、乳腺を抜けて母乳が噴き出すのが、気持ち良くて堪らない。一瞬で表情は緩んだ。口の中を満たしていた唾液が溢れて、ほくそ笑むクオルツの顔に散った。

クオルツの舌が、顔に散った結乃の唾液を掬い取る。

「いい加減認めろ。お前は、とびきりスケベな牝牛だと。俺に隷属を誓え。そうすれば、もっと強い快感を与えてやる」

何度も繰り返されてきた問いかけ。理性では拒まなければいけないとわかっていても、絶頂直後のふわふわとした余韻の中にとって、クオルツの言葉はあまりにも甘美で、魅力的な響きを帯びていた。

だが、それでも――

「わた、しは……負け、ない……あなたを、浄化して……あつくんを……取り戻す、から……」

胸の中に抱いた想いが、結乃を繋ぎ止めた。その言葉に、クオルツは狂ったように笑みを深くする。

「そう。それでいい。それでこそエスフェール……苦勞した甲斐があるというものだ。時間はまだたっぷりある。素直になるまで躓けてやる」

死刑宣告にも似たクオルツの言葉に、結乃はビクリと身を震わせる。それが恐怖に対する反応なのか、あるいはそれ以外の期待なのか、もはや、結乃自身にもわからなかった。



日付ももうじき変わるうかという深夜——住宅街の真ん中に位置する児童公園に、結乃は立っていた。指定されたとおりに遊具の前で、苛立ったように形の良い眉を歪める。

結乃を呼び出したはずの相手は、予定の時間を十分以上過ぎててもまだやってこない。非常識な時間帯の呼び出しに加え、その事実が結乃を苛立たせていた。しかしその美貌は、苛立ちを見せていても、魅力のエッセンスとなっていた。

「ぐふふっ。結乃たん、待った？」

低く、澀んだ声に結乃が振り返ると、急ぐ様子もない足取りで近づいてくる男性の姿があった。女性としては平均的な身長で結乃よりも数センチ低い。エスフェールをモチーフにした柄のTシャツはパツパツに張り詰めて、腋の付近をはじめとしたじつとりと汗染みが浮かんでいる。他人を外見で判断することのない結乃でも、正直あまり相手にしたくない相手だった。

「こんな時間に呼び出して、何の用？」

結乃を呼び出したのは、彼だった。中等部の頃にクラスが同じになったことはあったものの、個人的に話した記憶はほとんどない。今回の呼び出しにしても、普通ならば無視していたところだが、何故か結乃は応じていた。それも、交換した覚えもないSNS越しに、指定されたとおりに制服に着替えて。

「何の用、ってそりゃあ、ねえ？」

男は下卑た笑みを浮かべながら、ポケットに手をつ突っ込み、何か

を取りだした。

ビー玉ほどの大きさの紫の球だった。ネックレスのように鎖のついたそれを、男は結乃の目の前に吊す。何の説明もなく、突然そのようなものを見せられて訝しむ結乃だが、その視線は不思議と球体に吸い寄せられる。紫の球体は光を反射するのではなく、それ自体がうすほんやりと光を放っていた。とくん、とくんとまるで心臓の鼓動のようなテンポで光が強くなったり弱くなったりを繰り返す。

「あ……」

結乃の瞳から、まるで球体に吸い込まれるように理性の色が薄れて消えた。それと交換するように灯ったのは、情欲の炎。警戒心を宿していた美貌は、締まりのない淫靡な表情へと変わった。スカートの裾から覗く、むっちりとした肉感的な太もも同士をしきりに擦り合わされるのが、たまたまなく淫靡だった。

「早く変身してよ。エスフェールたん」

「はい……」

ほんやりと、あるいはうっとり、結乃は男の言葉に頷いた。

「カッティングアップ・エスフェール……」

寝言を漏らすような茫洋とした声音で、結乃は変身の起句を告げる。左手の中指に嵌めた真珠の指輪から放たれた光が結乃を包み、エスフェールへと変身させる。しかし、その様子は普段とは明確に異なっていた。

「ちんぽに媚びる淫乱おまんこ……聖晶希石エスフェール・ペルル……推参う……」

卑猥な口上を口にしながら、結乃は両手を頭の後ろで組み、ガニ

股に腰を落とす。

大ぶりの乳房を覆う晶衣の頂点、ぷっくりと勃起した乳頭の周辺は切り抜かれたように開いて、恥ずかしげもなくピンク色の乳輪を露わにしている。競泳用の水着を思わせるハイレグインナーは本来の意匠よりも切れ込みが深く、隠すべきスカートも構築されていない。代わりとばかりに、二本のディルドが前後の孔を貫いて、ういん、ういんと卑猥なモーター音を響かせる。

「あつ、ふう……んっ……ああつ……」

そのたびに結乃は心地よさそうに腰を前後に振りながら、甘い喘ぎを漏らす。男は結乃の背後にまわると、いやらしく蠢く十本の指を、結乃の豊乳に食い込ませるように揉みしだく。

「ふう、んっ……はああつ……」

そんな狼藉を働かれても、結乃の瞳に理性の光が戻ることはなかった。むしろ蕩けたような甘い喘ぎを漏らして、乳房を男の手に押しつけるように動く。

「そこらの劣化コスプレ商品じゃあこの質感は絶対出せないよ……ああ、やっぱり本物は最高だなあ……」

ぐにゆり、ぐにゆりと男の手指が結乃の乳房を堪能していく。

「それで、ちゃんとぼくの言いつけは守れたかい？」

言いつけ——その言葉をキーワードとするように、結乃の意識は記憶の中へと沈んでゆく。

「あ……ああつ……」

昼休みの、廊下でのことだ。

「ちよつと、田中君」

結乃が駆け抜けていく人影に声を掛けると、田中はビクツと肩を震わせて、その場に立ち止まった。

「えっ……お、俺か？」

自分が結乃に喚ばれたことが意外だったのか、田中はおそろおそろといった様子で振り返る。

「うん。廊下を走ったら危ないよ」

「あつ……えつと……悪い……」

結乃に注意されて、田中はぶいと目を逸らす。注意されたことに苛立ったという様子ではない。顔を真っ赤に染めて、照れたように目を逸らしつつも、ちらちらと視線は結乃に向く。その視線が異性としての欲求——性欲を帯びていることに結乃は気づいていた。

熱を帯びた視線の先、制服の下で、自分が着込んだ卑猥なショーツを思い、結乃はトクンツ、と子宮を跳ねさせる。

（私……学校なのに、こんなえつちちな下着を着て……しかも……避妊具まで縛って……そんな格好で、偉そうに人を注意して……）

注意に従って、歩調は早いながらも走ることなく去っていく田中の後ろ姿を見送りながら、結乃は制服の下で太ももを擦り合わせる。自分以外の誰にも聞こえないくらい小さな、しかし確かな、ニチャツと粘ついた音が漏れて、自分がしているのが堪らなく背徳的な行為であると再認識させてくる。

「はあ……んっ……ああ……」

肺腑の中で熱された空気を、吐息として吐き出す。その様子が、まわりの男子の目にどう映ったのか。口々に「

たっぷりと中身の入った卑猥な水風船たちが、重みでその存在を

自己主張していた。

「それじゃあ、昨日はどうだった？」

昼間の出来事を蕩々と語る結乃の胸の量感を楽しみながら、男は次の質問を口にする。

「き、のう……きのう、はあ……」

真っ先に頭の中に蘇ってくるのは、オスの匂いだった。

「ネットで……用意して……いただいた……男性と……乱交、セックス、しましたあ……」

口にすると、ほんやりと曖昧な像を結んでいた記憶が明瞭になっていく。相手は四人、いずれも父親と同じか、もっと上の世代の男性たちだった。仕事帰りなのか、いずれもそれなりに値の張りそうなスーツを脱ぎ捨てて一匹のオスになった中年男たちが、結乃に対してその牡欲を向ける。シヨッキングピンクのビキニと、ふとももの半ばまでを包み肉感の段を作る同じ色のロングソックスだけが、結乃の肌を申し訳程度に隠していた。

エラの張った肉棒を突きつけられると、頭の中が桃色のモヤで埋め尽くされて、どうして自分がそうしているのかもわからずに、ただ気持ち良くなりたいたいという本能だけに支配される。

長かったり、短かったり、太かったり、カリが強く張っていたり——四本あるのに、そのひとつとして同じモノはない。先端からはたらあ、と透明な先走りが染み出して、それを見ているだけで、結乃の上下の口がいやらしく涎を生産していく。

「ゴム有りて、それ以外はなんでも自由です」

事前に了承を得ていたその条件を改めて確認してから、避妊具の

パッケージを破り、蛍光色の水風船を取りだす。それらを口に咥えてから、フェラチオの要領で肉棒に被せていった。手をつけるよりもこの行<sup>パフォーマンス</sup>為をするだけで、何倍も興奮を引き出せるのだと結乃は知っていた。男たちは避妊具があるからと調子づいて、結乃を何度も犯した。口淫、乳淫、膣での性交、肛門性交、二穴挿入——もちろん、同意あつての行為だったが、父親と同年代の異性との行為は、結乃に倒錯的な興奮を与えた。それを語り終えると、男がニイと笑みを深める。

「それで？ 気持ち良かった？」

「はい……ねちっこい、責めで……すごく、気持ち良かった、です……」

「そうかそうか……よし。覚醒状態での暗示も効いてる……この調子ならもうすぐ、正気のままの結乃たんがほくのモノに……くくくっ。じゃあ今日は、そろそろ目を覚まそうか」

男がパンツ、と両手を叩く。まるで桃色の温水の中でたゆたっていたような結乃の意識が、一瞬で覚醒する。

「あれ……？ 私、なんで……こんな、ところに……？」

あたりを見回しても、そこには誰もいない。何故こんな時間に、こんな場所に来たのかも思い出せない。ただほんやりと、胸に指の感触の残滓が残っているような気だけがして——結乃は制服の上から、勃起した乳頭を指先でなぞる。

「ふあっ……ん……」

甘く、蕩けた喘ぎ声が、結乃以外誰もいない深夜の公園に溶けて、消えた。



淫夢の痕

薄ら明るく染まった窓から差し込む朝日で、結乃は目を覚ます。目覚まし時計を見れば、時間はまだ六時前。早起きをするにしてもまださすがに早すぎる時間。

夢を——見ていた。

詳しい内容は、頭にモヤがかかったように思い出せない。思い出せるのはそれがとても、とても、いやらしい淫夢だということ。

確認するように、制服のスカートの下に手を滑り込ませる。シルクのショーツのクロッチに触れると、くちゅり、と。粘ついた蜜が染みこんでいた。

「んっ……」

目を覚ますと決まって、下着はぐっしりと湿っていて、淫夢の中で味わった快樂の余韻が、熱となってお腹の奥を疼かせる。

「私、欲求不満……なのかな……」

沈んだ表情で吐き出した溜息は、しかしはつきりと熱を帯びていた。

確かめるために触れただけのはずだった指が、ショーツの湿りをなぞると、既に限界いっぱいまで蜜を蓄えた布地から搾りだされるように蜜が染み出す。

「はあ……んっ……」

痺れるような快感が股間から脳天までを一息に貫いて、頭の中が真っ白になった。

まっさらに染まった思考に、夢の中身がうっすらと浮かび上がっ

ては消えていく。

それが自分の、あり得たかも知れない可能性なのだ。結乃は半ば夢心地の中で理解した。

幻魔に敗北し、性の虜にされてしまった自分。

あるいは、救いの手を届かせることのできなかつた人々。

それらを思いだしながら、結乃はショーツの内側に指を這わせる。湿った花卉が、男性器代わりの指に媚びるように吸いついて、挿入をねだっているようだった。

薄れて、もはや断片しか残らない記憶を頼りに、結乃は花卉に指を埋める。

細く、華奢な指先は陵辱者の肉棒を模して束ねられる。

心なしか熱を増した吐息が喉を抜けること三回、束ねた指がぴたりと閉じた結乃の割れ目を割り開き、膣内へと挿入る。

「んっ……あっ……」

犯される。

恐怖と羞恥を生むはずのその想像に、結乃が上げたのは快感の声だった。キュウ、キュウと指に絡み締めつける肉壁を押し拡げながら、指肉棒は奥へと進んでいく。

「あっ……はあんっ……ふあっ……」

ざらついた天井を指先が擦ると、甘酸っぱい感覚が背筋を走る。

クイツ、クイツと。ベッドから腰が浮いて、より深く、気持ちいい場所に当たるよう指が蠢く。

「んっ……ふあっ……ふうっ、んっ……」

ぬちゃっ、ぬちゃっ、と粘り気の強い水音が結乃の耳を犯す。し

かしそれが羞恥の感情を呼び覚ますよりも早く、そして強く、快楽を求め、衝動が結乃を突き動かす。

「はあ……はあっ……あ、うんっ——♥」

ビクンツ、と。結乃の身体がひととき大きく震えて絶頂に達したことを知らせる。

「んっ、ふうっ♥」

股間から甘美な快感が駆け上がり、結乃の意識を快楽<sup>それ</sup>だけで染め上げる。表情は蕩け、口の端から唾液が溢れる。普段の理知的な美貌が嘘のような、だらしない淫女の笑み。

下腹部に刻まれた刻印が、喜ぶように妖しく光を放っていることに、結乃は気付かない。

# 奥付

聖晶希石エスフェール

発行日

令和3年12月31日

発行者

ADU (サークル：ニワカカミキリヤモドキ)

連絡先

Mail: adu\_64@yahoo.co.jp

Twitter: ADU\_64

印刷所

株式会社ポプルス

無断転載厳禁。

Reproduction without permission is prohibited.

この本の内容をWebサイト等に無断転載した場合、

「1ページにつき10,000円」および「1ページビューにつき500円」

の支払いを行う契約に同意したものと見なし、対応させていただきます。



聖晶希石

# エスフェール

Holy Crystal  
Espère

presented by  
ニワカカミキリヤモドキ

